無限暴走航路

0シュウト0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無限暴走航路

【Ｎコード】
Ｎ２７６３Ｚ

【作者名】
０シュウト０

【あらすじ】
ユーリが出てこない無限航路の小説

主人公が転生系です。故にパロディ、ご都合大量

始章

惑星ロウズ…

夜、空に浮かぶボイドゲート。僕はそれを見上げていた。

いつか、大銀河を渡るＯＧドッグになる事を夢見て…

始章・ロウズ編

ロウズ周辺宙域

「ちっ…早打ち男は嫌われるよ！」

一隻の輸送船を改造した艦、デイジーリップを操る女性が叫ぶ

それを追うように三隻の警備船、レベッカ級が追いかけてレーザーを撃つ。

そのうち一発が翼のように広がった部分に被弾する

「ッ…やべええ！」

爆発し、その余波でロウズへと落下していく。

「…え」

その落下していく先には…銀髪の少年がいた。

1章　ロウズ編

…少年の目の前には巨大な船が落ちている。

轟音と共に落下してきたそれは少年の脇を通過してその巨体を地に落としていた。

「いたたた…」

船から這い出てくる女性

それに少年は駆け寄った…が、少年は倒れてしまった。

「え！ちょっとアンタ！」

女性はその少年を抱き起こす。

そしてショートする船内へと運んでいったのだった

少年ｓｉｄｅ

「知らない天井だ…」

目

覚

める俺

いやふざけてる場合じゃないな。

無限航路やっていたら突然画面が光り輝いて、気がついたらベッドの上だった。

つかめっちゃ暗いのはなんでなん？

「気がついたかい？」

声のほうを見るとトスカさんがいた。…ここは叫ぶか

「打ち上げさん！？」

「いや、微妙に違う…いや合ってるのか？」

俺の一言で首を傾げる

つかアレか？ゲームの中に放り込まれたとかか？

デジモンワールド的な！？

…もうこのネタわかるのいないか…

ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

「エラー！エラー！」

「カンソクシャ二イジョウアリ」
「コチラカラノカイニュウウケツケズ」
「ウワガキモフカ」
「イレギュラー！イレギュラー！」
「ツイセキシャトウニュウフカノウ」

ｓｉｄｅｏｕｔ少年ｓｉｄｅ

さて、どっか騒がしいみたいだが…

まぁ状況をまとめるとだ。

「確かに飛ぶだけはいけるねぇ」
「大気圏離脱したらトトラスに向かいましょう。」
航行に支障が出ない部分からパーツ集めて船を直した。
被弾したところはバラし、気密を保つため穴をふさぎ、デイジーリップは推進装置とブリッジのみの形になった。
トスカさんは渋っていたが、ロウズで一生過ごす気ですかと聞いたら渋々了承してくれた。

てかまさか修理出来るとは驚いた。

頭の中にあったユーリの記憶まじぱねぇ「さぁて…いこうか！」

次の瞬間…意識を失った。
ま…た…か…よ…

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅｉｎ

「子坊。起きなよ」
身体が揺れ、意識が戻る。
するとどうだろう。
目の前に『売却済み』とかかれた。デイジーリップがあるではないか。
…確かデイジーリップってエキストラモードでＯＧだっけ…
…そして気づくとトスカさんに肩に担がれていた。
「ちったぁ輸送船を買う足しにはなるだろうさ。設計図買わないとねぇ」
寂しそうにトスカさんは笑う。
…そして俺は

将来来るであろう。トスカ必死イベント回避を予期して内心ガッツポーズしていた。

んでトトラスの設計図屋

絶望するトスカを横目に二つの設計図を手にする俺

なんで絶望してるかというと、デイジーリップは解体費と売却費が同額だったからだ。

なんでも船を売却する場合、
売却費－解体費という数式が出るらしい。
本来はデイジーリップはマイナス値になるところだったが、ドロイドのお情けで０になったのだ。
ちなみに俺は自前の２０００００Ｇでお買い物である。
周回プレイのままらしく、高額を所有していた
「夜も末だねぇ」
といいつつカップ酒を飲む
…手持ちないのかと聞いたら宵越しの金はもたねぇ！とか言われた。
カップ酒代は俺が出しました。さて、入手した設計図はアルク級とジュノー級である。
性能的には大差はない。大マゼランと比べれば微々たるものである。
ただしジュノー級のほうが貨物室一個分くらい配置しやすい。
ただし戦闘艦としてはアルク級が若干高いのである。
とりあえずアルク級を作るかな。
俺はトスカさんを残して軌道エレベーターに乗ったんで飛んで次の日

「しっかしよくもまぁこんな人材を集めたねぇ。一通りいるじゃないか。」

「トトラスだけで半分ですがね。ロウズ以外の惑星なら集めるのはなんとかなりました。」

総人数１５０人を雇うことに成功した。
ロウズ宙域では宇宙に出れる人は決まっているため、数を集める事はできたのだ。

「しかもあんな大金持ってたなんてねぇ、子坊を侮っていたよ」
「俺は…ゼロですよ。ゼロ」

某強化人間研究所の最初の男、もしくは反逆の人の名を名乗る。

「ゼロねぇ…まるで偽名だねぇ。相当やましいことがあるのかい？」

姐さんの眼が冷たい！

「さて、出発すよ～！とりあえず目指せ３０００撃破！」

「…」

まだ冷たいよ…

ちなみに何故３０００というとただ単にエルメラーダ級が欲しいだけである。

ロウズの時点でエルメラーダ級…ロマンです
まぁネージリッドの最新鋭艦がいまの時点で入手可能かは知らない

けどね。

ゲームの中では確認済み。あれは面倒だったぜ～。ストーリー無視してずっとロウズで名声稼いでたからなぁ。まぁおかげであの眼抉られるイベントでグランヘイムが自分の船の上のほうに止まるのがわかった。

いいのか悪いのか…

そんな訳で空間通商管理局でランキングを確認できるため、おそらくエルメラーダ級やバロンズィウス級が手に入る。高額でかさばって使いづらいだろうけど、モジュールも手に入るしな。

「あ。トスカさん。副官お願いしてもいいですか？いくら雇えたといってもトスカさんが一番信用できますし。」

「構わないよ。プーよりましだしね」

ちょ。それ別の人の台詞っ

ともかく、司令艦橋へとあがると職歴から信用できそうな連中…ようはその筋のリーダーや専門家が集まっていた

まぁ俺が艦橋要員で集めたんだけどね！

「艦長、聞いていたより若いわね。」

シアンさん、女性、２４歳

元アナウンサーなのでメインオペレーターをしてもらってる

「でもいいんじゃない？美形よ？」

航海長

ヒメさん、女性、２４歳
シアンさんの同級生で航路地図会社の社長していたらしい。
「よろしく頼むぜ！艦長！」
砲雷班長
ジランさん。男、２８歳
ロウズ警備船の砲雷士してたらしい
「艦橋での挨拶は済ませたッスよ」
レーダー管制長
マドさん、２０歳、男性
ジランさん同様元ロウズ警備船員
「インフラトンインヴァイターも最高潮だったよ。」
機関長
レインさん、６９歳
実はかつてデラコンダがまだＯＧドッグしてる時の機関長だったらしい。
…大物かも
でも艦橋要員じゃないのに何故いるし
「俺らはまだ仕事ないから挨拶に来たぜ。艦長」
整備長
タカギさん、男、３０歳
元ロウズ警備船の整備士
「出航してからが仕事アルからね。」

シェフ
ワンさん、４２歳
家族率いて参加の料亭の人
…つか心読んだ？
「ま。搬入作業も終わりですからもう出航しますよ。」
「了解。空間通商管理局に連絡いれます。」
船が動き出すためにその巨体を揺らす。
「よし、飛べッ」
その一言を合図に俺たちは宇宙へと旅立った。

2章　ロウズ終幕編（前書き）

お初ですね。前話はいかがでしたか？

さて今回はいきなりオリジナル艦がでます。乞うご期待！

2章　ロウズ終幕編

ロウズ警備船船長ｓｉｄｅ

「『黒』捕捉、砲雷士、目標標準！」

「今度こそ叩き落とすぞ！」

例え適うまいとて仕掛けざるを得ない。この職についた事を激しく後悔していた。

黒いアルク級を旗艦とした駆逐艦の艦隊がロウズ宙域に現れたのは２ヶ月前、最初は一隻だったが、今ではアルク級が二隻、ジュノー級が三隻と
増長されてしまっている。
しかし領主のデコランダには第一級最優先目標と言われているので見つけ次第攻撃せねばならない。

「くそっ！全弾回避された！」

「目標に熱量増大！攻撃来ます」

「総員退艦ー！」

やはり適わないか…

ｓｉｄｅｏｕｔ

ゼロｓｉｄｅ
「よし、ナイス。砲雷班！」
「いつも通り原形は留めさせたぜ」
駆逐艦で精密射撃ってすげぇわ。うちの砲雷班
原形留めさせたのはまた出てきてもらうためです。
これを宇宙港に持っていって売るんだが、売った中古品をまたロウズ警備船として買ってもらう。
んでまた奪うっていうループで生計立てている。
名声値ももらえるし。拿捕するのもうちくらいなのでおいしくいただいてます。ちなみにアルク級一番艦とジュノー級一番艦以外は無人で、輸送船扱いだ。
アルク級二番艦は盾も兼用するし。
ジュノー級の指揮はトスカさん…ではなくなんとトーロである。
バッショで雇った人間の中にトーロがいたのは驚いたね。
何故かは知らん。
けど初対面だからなんとも言えなかった。
履歴によれば輸送船団率いていたから一隻任せた
トスカさんには副官として色々アドバイスもらわないとだしね。
「シアンさん、カウントは？」

「今のところ、２８７１隻ね。２ヶ月でこれは凄いんじゃない？」
１日で５０隻くらいやったときもあったからな。
「一旦トトラスにもどろーか。ジュノーにも入電。」
「アイサー。キャプテン」
「そろそろランキング見に行こうか。」
エルメラーダ級欲しいんだよねぇ。
バロンズィウス級って性能良いけど拡張性割と良くないから、長距離航行に向いてなさそうだし。居住性も考えないとだしな。
「しかし完全に海賊っスね。」
「いいんじゃない？相手はデラコンダだけだし」
ま。問題はいつチェルシーが出てくるかなんだよね。
原作なら即イベント発生したのに…
もしかしたらチェルシー無しになってる？
「あ。ジュノー一番艦から入電。」
「ん？画面に出して、」
トーロの野郎…なんの用だろう？
『ういーッス』
「用件いえ。」

『つめてぇな。俺とお前の仲だろ？』

「いやそんな仲になった記憶ないし」

ランキング早く見に行きたいんだけど…

『まぁいいや』

よくないわい

『ニュース見てみろよ。デラコンダ本人が直接ゲート張るらしいぜ』

まじすかい？

「にゃにゃ？…シアンさん？」

「はい、今確認しました。専用艦使うみたいでゲートに向かって今朝出航したようです。」

確か大出力レーザー積んでるんだっけ…

うは、面倒…

～トトラス宇宙港～

とりあえずランキング見に空間通商管理局いこうか。

積んでいた荷物を五隻の艦から卸す間、メンバーにはみんな、お暇を与えた。

首ではなく休暇だよん。

「しかしよ。ランキング見に行くのはいいがそうかんたんにあがるのか？」

「いや今まで簡単じゃなかったからね？」
トーロと二人でランキングを見に窓口にいく。

トスカさん？あの人は酒場いったよ。

「いらっしゃいませ！ランキング順位の確認ですね」

「うす」

他に何しにここにくるのよ。

「お客様のランキングは…なんと２０位です！」

「…まじかよ」

唖然とするトーロ

いや狙ってたからね？
んで初確認だからな…

「…えっとこちらがランキング報酬になります！」

なんか大量に設計図キター！

大半はモジュールだな

「…バロンズィウスに…未完成の謎の設計図ぅ？」
見た目エルメラーダ級っぽいんだけど、若干形が違うっていうか…
「翼なくね？」
「は？」
「え？」
なにいってんだこいつ、みたいな顔で俺の顔みるドロイドとトーロ。
なんか双胴艦みたいなシルエットではあるんだが、翼っぽいないし、翼っぽいのあった部分の甲板にＬサイズのレーザー砲ついているんだよね。さらにＳサイズの砲がＭサイズにランクアップしてる
つまりＬ×３、Ｍ×３の超攻撃空母になってんのよ。
「なんなのよ。これ」
もう聞くしかあるまい。
「これはネージリッドで開発されていましたが、断念された空母ですね。単艦で戦艦と空母の役割を同時に行うためのものらしいです。」
…要はエルメラーダの前身的なのか？
「…うし。これ黒く染めて作る。」
「…２０００級か…小マゼランでは敵なしだな。」

グランヘイムといい勝負できたらいいな。
ちなみにランキングみたらヴァランタインさんの名声値、一億突破してたね。さすがに原作とは違うか。
ちなみにロエンローグは22位、サマラさんは18位、グラッシュは55位だった。
その辺は原作とは違うのね「そういえば、俺らってどんな感じに見られてるんだ？」
と、トーロ
俺も気になるな
「ロウズ警備船やデラコンダを崇拝する方々からは海賊として、宇宙に出たい方からは義賊のように見られてますね。ロウズ宙域では指名手配されてますが他の宙域ではランキングにいきなり上位にめり込んできた猛者のように見られていると思います。」
流石ドロイド、一息でいうとは…
「海賊か…」
「船から降りたくなったか？トーロ」
物資の運搬に関してはプロ並みのトーロが抜けたら痛いからやめてほしくないがな…
「いんや？他の宙域いったら大した事にならないだろ？お前次第だけどさ。」
「ま。他の宙域では海賊狙いたいとこだ。」

流石に軍に睨まれたらヤバいっつーの

「じゃ、トーロ好きにしていいぜ。俺は空母作ってくる」

「おうよ」

俺はトーロと別れて造船所に向かった。

造船所ではアルク級やジュノー級、フランコ級が改修や製造されていた。

実はロウズ警備船が大量にやられたため、ロウズの法を無視したい反デラコンダの連中が宇宙に出まくっているからだ。とはいえゲートが閉鎖されているため、他の惑星間のみであるが…

…俺のせいか？

まぁいいや。

「いらっしゃいませー。」

「これ製造したいんだ。」

そういってエルメラーダ（？）級の設計図をみせた

「こちらは宇宙初の開発ですので名前のほうをつけてもらえますか？」

「やっぱり名前ないのか…」

エルメラーダとつける訳には行かないからなぁ…

…よし。

「ソロモン級双胴空母で！」

「了解ですー。」

もちろん亡霊とかいる某宇宙要塞から命名しました。ただ接近されたら弱いから早く本国いってまともな軍用駆逐艦買わないとだな。

けどエルメッツァならアーメスタ級だよなぁ…

軍人にあったら交渉してみるか。

そして俺はコンソールで船内のモジュールを配置していくのであった。

完成は明朝らしい。

足りない人材はドロイドいれないとな。

ちなみにドロイドってあれだ。オープニングムービーでコンソール叩いてたロボット。

人間の代わりにはなるけど、突発した能力ないからな。可能な限り人を雇いたい。

…それを終えたら寝よ

ｓｉｄｅｏｕｔ

翌日

sidein

「…」
「…」
「…」
「…」

「お。やっぱりでけぇな！」

「感想ありがとうトーロ。君は心の友だ」

トーロ以外無言ってどーよ。これ。

まぁグランヘイムよりでかい艦の前で普通よりましだが。

「…なんだいこれ？」

トスカさんがようやく口を開いた。

「ソロモン級双胴空母。宇宙で俺しか持ってない超大型艦。我らが旗艦にして、新しい家だ！」

そう。そこにあるのはエルメラーダに酷似してるが、翼はなく、通常の戦艦を超える砲塔を標準装備した漆黒の空母。

「ちなみに、スポーツジムに自然ドーム。シップショップ、大型浴槽完備、食堂も一流ホテル越えの設備、医務室も病院並みだ。見ての通り空母なので格納庫や整備室もでっかいぜ」

ランキングでもらった。

「「「う、うおおっ！」」」整備士、生活班、保安員を筆頭に歓声

があがる。
ちなみに科学班はいないのよ。
何故なら乗船希望の科学者がロウズ宙域にいないから。
「艦橋もアイルラーゼンのものだ。管制室の機器も最高のものを用意した！」

「「「わああ！」」」
今度は全員から歓声があがる「しかし金が尽きそうだ！」

「…」

今度は冷めた…だと…！

「故に、いまのままロウズ警備船を襲っていては無意味だ！これより我が艦隊はゲートの敵を蹴散らし、エルメッツァ本国を目指す！俺についてくるものは続け、去るものは去っても構わない。ただし一言言わせてくれ。今までありがとう！」
そう言い終われば艦への入り口を開ける

「「わあああ！」」

「私はついていくよ。これからは正式にクルーさ。」
とトスカさん

「みんなはええな…」
とトーロ

この二人以外みんな我先にとソロモン級へと入っていった。

早い。早いよ。

「あ。トーロ、当面は保安局長についてくれ、アルク級とジュノー級は全て前衛で前に出すから無人にした。」

「いいぜ。艦長職は肩がこるしな…」

「じゃ私等もいくよ」

気づけば俺たち以外いないし。

うちのクルーまじぱねぇ…

それからそれから

各部署に人員が行き届くまで一時間かかり、ようやく出発した。

最初の1日こそゴタゴタしたが、1日半かけてボイドゲート前までやってきた。

「艦長！敵旗艦から通信です。」「受けてやりな。」

「了解。」

デラコンダのやつナンのようだ？

『君がゼロ君だね？さぁロウズに戻りたまえ。今なら刑も軽くして

やろう。』

偉そうな…
俺。偉そうな傲慢なの嫌いなんだよね。

「砲雷班、威嚇で敵旗艦の大型砲に主砲３つ発射」

「オーケイ！」

『なに！？』

ソロモン級からレーザーＬというべき３つの閃光が放たれる。
それはデラコンダの旗艦…
右側に大型砲をつけた超アンチシンメトリーな艦の大型砲に直撃し、
爆散させた。

「帰りたまえ？帰るべきはそっちだろ？てか避けろよ。そのための
威嚇なんだからな」
堂々と通信で言ってるんだから回避行動取れよ…
『ちっ…ならば全勢力で相手してやろう。』

「艦長？レーダーに感あり、ボイドゲートのからレベッカ級がくる
ッスよ。１０機…いや２０機！さらにジャンゴ級１０機」

…よし。ならば戦争だ！

「アルク、ジュノーを前方へ出せ！砲雷班は敵射程外から迎撃！」

「「了解！」」

ソロモンからレーザーが何度も放たれる。
まぁレベッカ級はアルク級の連装砲が直撃するだけで落ちるのでオーバーキルになる。
あとでわかった事だがソロモン級は対艦の数値がバロンズィウス並だった。
空母としちゃあり得んよ…。もはやチートだね。

「レベッカ級、八隻大破！ジャンゴ級二隻が消滅！」
レベッカ級はなんとか回避してかすったようだが、大破か…でも直撃したジャンゴ級は消滅って…
「…ごめんなさい」
「いやなに謝ってるんだい！？」

いやだって消滅だよ！？
凶悪すぎでしょ！うちの艦！「いや残骸すら残らないのは…」
「宇宙に出ているんだ。ダークマターになるくらいは承知してるだろうさ」

「ならいいっすけど…」
そして相手の射程外から撃ってるため攻撃が来ない。
しかもソロモンはその凶悪な主砲と副砲を撃ちまくっているわけで…

「…敵旗艦以外逃亡を始めました。」

「「「だろうね…」」」
艦橋にいる人の心の内が　一緒になった。

「敵艦隊に通達。ボイドゲート封鎖を解くのであれば攻撃をしない。
ただし依然として敵対するのであればダークマターになっていただ

く。と」

「了解です。」

わざわざ追撃する必要ないしな。案の定旗艦以外は逃げていく。

残るはデラコンダただ一隻！

『小僧…貴様ぁぁぁあ！』

うは。テラ怒ってる（笑）

「まぁ落ち着け。砲雷班、目標あのデコランダ」

「ブッ！り、りょうかいっ」

「かんちょ…それは…」

「あっはははは！」

決まった…てか皆のツボにはまった。

『ぐぬぬぬ！このままでは済まさんぞ！』

「っ…通信、切れました。」

「敵…旗艦、接近！」

笑いが止まらない件（笑）

こらえながら仕事してるよ皆

「さてまじめになろう。砲雷班、敵旗艦前方に集中砲火！アルク級やジュノー級からも撃たせろ！」

「おう！」

デラコンダの船は最大戦速でなのか、かなりのスピードで迫ってく

る。

流石に特攻はまずいぞ？

「主砲、副砲着弾、敵艦通常砲門開口！熱量増大！」

「させねぇよ！今までこき使われた恨みだ！」

「兄貴ヤるッス！」

「おうよ！艦長、バーストリミッターの解除を！」

そういやジランとマドは元ロウズ警備船だもんな。恨みもあるのか。

「よし。許可する。そのかわりのこの一斉射撃で仕留めろ。」

「おうよ！」

恐らく回避軌道をとっていない相手だ。撃沈するだろう。

「バーストリミッター解除！全砲塔標準！はっしゃあああ！」

ソロモンから放たれるレーザー。

それはデラコンダの船に着弾し、大爆発を起こした。

「インフラトン反応拡散…撃沈です！」

「おっしゃあああ！これが俺の力だぁぁぁ！」

「兄貴流石ッス！」

ものすごく喜んでるジランとマド

だがジラン、それはお前の力じゃなく、俺のソロモンの力だ！

「さて、邪魔者は消えたねぇ。ゲートに突っ込むとするかい！」

「いよいよロウズから出るんだな！」

そして期待にテンションあがる艦橋。他の部署も同じだろうな。

…だがしかし。

「いやまずは目の前のデブリ回収するよ。」

「え～…」

「空気読んでよ艦長…」

俺の一言で落胆する皆

いや金になるし。なにより…

「マド、ゲート前で浮いてるのな～んだ？」

「なにってデラコンダの…あ！」

気づいたらしい。

そう、ゲート前で戦闘したためデブリを回収して撤去しないと通れないのだ。

死しても邪魔者か、デラコンダさんよ…

「わかったら早速作業にかかるよ。最低人数だけ残してあとはジュノー級とアルク級にいくよ。ソロモンでそのままいったら傷ついちまう」

「「うぃ～す…」」

そんな訳で足止め食らうのだった。

2章　ロウズ終幕編（後書き）

オリジナル艦ことソロモン級双胴空母が出ました。

流石にエルメラーダを使うわけにはいかなかったので（苦笑）

性能としては原作のランキング報酬のグランヘイム並みですね。

いきなりの妄想暴走です。

次回はさらなる暴走もあるかも…

3章　ラッツィオ編1（前書き）

ついに来ました。ラッツィオ編！

さてさてこれからどうなるか…乞うご期待！

3章　ラッツィオ編1

ゼロｓｉｄｅｉｎ

「…げ。」

デラコンダ艦隊残骸をジャンク品として回収に2日かかり…いや普通に考えたら早いんだが…ゲートに突入したんだが…

「…えっとシルエット照合完了ッス。スカーバレル海賊団のガラーナ級2、ゼラーナ級1、オルドーネ級1、ジャンゴ級8ッス。全艦こちらに回航中、熱量増大ッスね」

いきなりスカーバレル海賊に遭遇…しかもこっちに尻向けた状態である。

「ついでにその先にボイエン級4隻、サウザーン級1隻、アリアストア級4隻ッス」

「カラーリングからエルメッツァ本国の正規軍だねぇ。この辺じゃ珍しいよ。」

…こんなイベントなかったと思うんだけどさ

「ま、軍人に恩売るのも一興か、ジラン、スカーバレルにぶっ放せ！」

「オーライ！」

こっちにくる前に撃ち込む。

ソロモンのレーザーが火を吹く！

…なんか違うか？

「あ！オルドーネ級が避けたッス。完全回避ッス」

「回航中のあの状態でか！？」

ものすごい驚いてるジラン。

そりゃ驚くよな。

ロウズではほぼ百発百中だったんだから

「でもオルドーネ級以外は全てレーザーの余波で行動不能ッス」

「敵艦から通信。」

通信用の画面にオールバックの男が映る。

『てめぇ…こっちの邪魔しやがって…次は容赦しねぇぞ！』

「次があるとでもお「通信切断されました」

ちょっ！遮られた！

「しかも足早に離脱されたッス」

「にがしたぁぁぁあ！？」

驚きすぎです。砲雷班

「今度はサウザーン級から入電です。」

今度は若干体格がいい軍人が写った

『こちらエルメッツァ中央政府軍、オムス・ウェル中佐だ。援護感

謝する。』

ふむ。それなりの態度で対応してやるか

「いえ。それよりも何故このような地点で戦闘を？」

『うむ。我々はスカーバレル海賊団を警戒してパトロールしていたのだが、たまたま輸送船団を襲う連中を見つけてな。』

「なるほど。」

『うむ。今回の礼をしたい。後日ラッツィオ軍基地まで来てもらえるか？』

「構いませんよ。」

行ったついでにアーメスタ交渉してやるか。

『ではまた会おう。』

「エルメッツァ艦隊、ボイエン級を伴って離脱していきます。」

「艦長どうします？ここからならまずはポポスで荷を降ろすことをお勧めしますよ？」

と航海長、

「ならそのように。ついでにトラクタービームで行動不能の連中も引っ張っていこう。スカーバレルの連中に刃向かったらタンホイザにぶち込むって入電入れといて」

「了解です。」ソロモン級で引っ張りながらアルク級とジュノー級

で後方から監視する。
無人艦だからできる芸当だよね
んでポポス

ポポスの宇宙港に入ってすぐ、引いてきたスカーバレルの船を売った。
中の連中にはそのまま港で降ろした。

宇宙に放り出されるよりましだろう。
ついでにアルク級、ジュノー級、ソロモン級に積んでいたジャンク品も引き取ってもらった。
あとで精算してもらう。

そしてポポスにて3日間休暇を取った俺たちは再び銀河へと旅立った
「とりあえずラッツィオ軍基地にいくしかないよなぁ…」

「いちお、最短航路を見つけてあるわ。ポポスからラッツィオ経由でいくルートね。一旦ラッツィオに寄航する事をお勧めするわ。」

流石はうちの航海長ヒメさん！そこに痺れる憧れ（ｒｙ

「そいやラッツィオに確かギルドあるんだっけ？」

「そういやあったね。誰か雇いたいのかい？」

俺の質問に真っ先にトスカさんが答えてくれた。
確かトランプ隊がいたはずだが…

「そろそろ科学班と操舵士を雇いたいしさ。」

科学班は仕方ないとしても操舵士は欲しいな。重力下でバレルロールさせるくらいの実力の持ち主いたらいいな…。
「寄航する度に募集はしてみてるけど、まだまだ欲しい人材はあるしね。優秀な人材ならいるに越したことはない」

「確かにねぇ。」

そんなこんなでスカーバレル海賊団を撃破しつつラッツィオに寄航する。
今度はオルドーネ級が捕獲できたけどこいつを解体処理するのに五日かかるそうな。

つまりその間、ラッツィオで休暇である。

その間にトーロやトスカさんを引き連れてギルドにやってきた。

「…うわぁ。」
「袖がなげぇな。」

なんか隅に子供いたし。
とりあえず窓口にいくのである。

「すみません。人材を雇いたいのですが…できれば傭兵とか科学者とか操舵士とか…」

「傭兵と操舵士でしたら三番ブースにトランプ隊の方々がおります。」

トランプ隊ｋｔｋｒ！
さっそくいってみた。

「…ほほぅ。あなたが」「若いじゃないか。大丈夫なのかい？」

いかついおっさんとおばさん…いったら殺されそ。
ププロネンとガザンやね。

「ども。ゼロっていいます。是非あなた方を雇いたいんですよ。どうですかね？」

「ふむ…フェノメナ・ログを見せていただきたい。」

「おっけ。」
別に構わないのでログ…航海記録を見せる。
これは全ての航路、交戦記録が自動記録されている。
基本的にこれを目安にして品定めされるのだよ。

「…これはこれは」
「…半端ないな」

「で、乗ってくれる？」
ま、多分大丈夫だろ。

「あなたになら我々の命も預けられそうだ。私はププロネン、トランプ隊のリーダーをしています。」

「あたしはガザンだ。久々に腕がなるねぇ！」

「お、交渉成立のようだねぇ。」

「良かった良かった。じゃ俺はトランプ隊の方々を艦に案内するから、二人はどする？」

「俺は酒場いってくるぜ」

とトーロ

「お？なら飲み比べするかい？」

とトスカさん。

「おっけ。出航までには帰るんだよ。あと４日あるから大丈夫だろうけど」

二人を見送り、乗艦のため荷をまとめにいったトランプ隊を待つ間にギルドでさらなる人材発掘をした。

その結果、科学班数人とその筆頭のホロムさん。操舵士のアールドさん。

彼らを雇う事に成功した。彼らとトランプ隊を引き連れて宇宙港へとやってきた。

「ふむ…しかしどれが艦長のものですかな？」

ラッツィオの宇宙港には

サウザーン級やオルドーネ級（解体処理中）、フランコ級、ボイエン級、アルク級があった。

「ま、オルドーネ級がそうだ。といっても過言じゃないけど」

そのまま１０００級以下の船があるドッグから離れ、大型艦船ドッグに向かう。

…彼らの疑念の目線がキツいッス

つか大型艦船ドッグもうちのしか使ってないからアルク級やジュノー級も一緒に入れてるけど。

「これが俺の旗艦にして君たちのこれからの家、ソロモン級双胴空母さぁ！」

「「「…」」」

あれ？なんかデジャヴ

「…これはネージリンス…いやネージリッド系列の艦船ですね。空母という事は艦載機も？我々はパイロットですのであれば活躍できますが」

カラーリング変えてるのに見てわかるとか…ププロネンさんパネェ！

「その通りネージリッドのです。いや艦載機は現在ないから、入手できるまでは傭兵の皆さんには教官や訓練積んでもらう事になりそうかな。」

確かカルバライヤで入手できたっけ…

でもないよりマシ程度の性能しかないからな…

「ふむ…わかりました。」

「納得していただけて助かるよ。当面は保安局所属だから治安守っ

てね。」

「了解だ。あたしらは白兵もこなせるからね！」

「「おー！」」

歓声があがるトランプ隊

「操舵士のアールドさんとホロムさん方は艦橋いって挨拶。その後研究室に案内するよ。さてここにだしたります端末がうちの乗員の証ですので無くさないように。」

そういいながらスマートフォンぽい端末を渡す。

実はこれ、スマートフォンとかにものすごく近いのに性能が隣の惑星ですらつながるほど高性能。

艦内では財布や身分証の役割もしてアプリも入っている。しかも艦内地図完備で改修の度に自動更新である。

マジパネェ…

4章　ラッツィオ編2

「ゼロ艦長、あんたまだ宇宙に飛び出してから半年も経ってないんだって？」

誰から聞いたし。

今、ソロモン艦隊はラッツィオ軍基地に向かっている。

…惑星の名前が基地て…

ついでに生活班に人が増えた。トーロの幼なじみのティータだ。お兄さんが軍人だが音信不通ということらしい。

聞くも涙、語るも涙の話があったらしく、トスカさんが副官権限で仲間にしたらしい。

…まぁワンさんとこも人手不足なところあったからな。

そして現在、俺はガザンさんとププロネンさんと共に艦内巡りをしている。ププロネンさんにはリーダーとしての先輩でもあるので色々勉強になる。「そうだけど、やっぱり経験が少ない艦長じゃ不安かい？」

「ガハハッ！自治領一つつぶした上にランキング上位のガキを不安に思うもんか。この宇宙じゃログがものをいう。自信を持つこった。」

「ういっす、しかし自治領つぶしたのはまずかったですかね」

「いやいや、気に病むことはありますまい」
ププロネンさんが小さく笑い、続ける
「風のウワサで、ヤツのことは私も聞いておりましたからな。多くのＯＧドッグはヤツのことを快く思っていなかったと思いますよ。」
「ならむしろいいことしたってところかな」
「そうゆうことですな」
豪快に笑う俺ら三人
その間に食堂についた。
トランプ隊の二人は初の食堂、俺はティータに会いにきたのだ。
「ういっすワンさん」
「アイヤー。艦長また来てくれたアルか？」
厨房から顔を出すワンさん
いまはクルーもそんなにいないようで暇なようだ。
「トランプ隊のお二人と来たよ。ところで新入りのティータとやらはいる？」
「いるアルよ。ティータさーん？シャチョさんがおよびアルよー」
そういいながら厨房に戻るワンさん。
つかなんか色々混じってる！？
ププロネンさんやガザンさんも苦笑まじりだ。

「あ、あの始めましてっ」
今度は長髪の女の子が出てきた。
「あなたがティータさん？」
「はいっ」頷く。
イベント通りだとこの子の兄さん、死亡フラグ満載なんだよなぁ…
「軍基地では一緒にオムスんとこいくよね？多分お兄さんのこと聞けるよ」
「お願いします！」
食いつきがいいことで…
「じゃ注文頼むよー。俺はラーメン。お二人はどうする？」
「では私は炒飯セットとやらを…ガザンはいかがします？」
「あたしも同じやつでいいよ。」
「はい。ではしばらくお待ちください！」
注文を受け、厨房へ走るティータさん。
ワンさんのは中華がメインである。洋や和も充実させたいところだな…
「オムス中佐ですか…実は彼とは一度砲火を交えたことがありましてね。」

「え！？」

おいおい。まさか。この人、エルメッツァの中央政府軍に喧嘩うったんじゃ…

「いや、まぁ…最近ではありませんよ。少々やんちゃだった、若い頃の話です。」

「アンタの場合、やんちゃじゃすまない話だったけどね。」

「ふふ…さて、どうでしょうか？」

茶化すガザンさんとごまかすププロネンさん。

本当に仲がいいんだな。

「できたアルよー！」

厨房からワンさんの声がする。

そして俺たちの前に注文した料理が並んだ。

「ほほぅ。これはラッツィオでも滅多にお目にかかれないものですな。これは美味い。」

一口食べて料理を誉める。

確かに美味い。この腕の料理人がロウズに埋もれてたのは驚きだ。

ワンさん曰わく物価が高すぎたらしい。

さて食堂で料理を堪能した後、俺は二人と別れて艦内を歩いた。目指すは格納庫の横にある整備庫。

その近くには科学ラボや解析室がある研究区画となっている。

このソロモン級、拡張性が原作のエルメラーダの倍近くあった。

原作だと入れられないところがあったが、こちらだとかなり入る。

「おや？」

なにやら言い争いが聞こえる

「だっから！作るんだったら人型だろうがよ！作業用に転用できるぜ！」整備班長タカギさんと

「否！断じて否！やるのであればスピード重視である！戦闘機型にすべきだ！」

科学班長ホロムさんの叫びだわこれ…

うわ。面倒臭いぞこれ…

俺は反転して去った。

尚、宇宙艦はグラビトン・ウェルにより重力が発生している。
そのために歩けるのだが、ソロモン級のように２０００ｍ級の艦船には歩く歩道がある。

たまに空港とか駅にあるアレだ。

ちなみにあとで聞いた話だが、艦載機の開発をしていたそうな。

俺は許可していない。

『ラッツィオ軍基地にまもなく到着致します。艦長は艦橋に起こしください。繰り返します…』

「にゃ？」

もうラッツィオ軍基地についたのか。

面倒なんだよなぁ。軍人に会うなんてさ…
仕方ないからいくけどね。
そんな訳で艦橋に向かうのだった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅｉｎ

ラッツィオ軍基地

今回はトーロ、ティータ、トスカさんの三人を連れてきた。
守衛の人に一言いればオムス中佐のいる部屋に案内された。

「よく来てくれた。」

入ればオムスに迎えられた、

「改めて自己紹介しよう。エルメッツァ連邦中央政府軍、第４方面軍第１２２艦隊所属オムス・ウェル中佐だ。それとこちらは私の上官のモルポタ・ヌーン大佐」

「…」

無言かよぅ

「そしてこちらは基地司令の…」
「テラー・ムンス、階級は中佐だ。」
こっちはまだいい人そうだよなぁ

「しかし通信でも思ったがまさか、君のような少年が艦長とは…」

「なにか問題でも？」
品定めするように見やがって…

「いや君のような新しい視点をもつものも必要なのかもしれない。君はこの宙域の状況をどう見るかね？この海賊がたむろし、したい放題の状況を…」

「そりゃあ中央政府がだらしないんじゃないの？」
トーロがビシッと言うなぁ。

「ま、本当のことだね」
頷く俺

「む、そういわれると返す言葉がないな…だが今は連邦全域が非常に不安定なため、軍も手が回らないのだよ、」

「んで？」

「うむ。君たちの腕を見込んで海賊討伐に協力して欲しいのだ。もちろんこちらで用意できる限りの報酬も用意する。」

「…」

美味すぎる話だな

「おいしい話だけど、軍の一員として扱われるのはしゃくだねぇ。」

「こちらはそんなつもりはないのだが…」

よし…案は決まった。

「なら報酬はグロスター級とアーメスタ級の設計図、あと金ね。それと海賊のジャンクとかの入手も許可してほしい。」

…そして何故か静まる

…静まる？

「…ゼロ。あんたねぇ」

トスカさんが呆れてる、

「君は度胸があるのだな…」

「むしろ当たり前かと。こちらはクルーの命を預かってる身です。ただ軍の露払いにつかわれる訳にはいきませんから。」

一息ついて、さらに続ける

「それと、ここにいるティータのお兄さんが軍人だそうで、音信不通らしいのです。なにかご存知ありませんか？」

「ふむ…そのお兄さんの名前と所属は？」

「所属はわかりません…けど名前はザッカスです。」
「ほう！？君はザッカス中尉の妹さんなのか！」
オムスの声変わったよ！？
「驚いたな…ザッカス中尉は今、スカーバレル海賊団に潜入している。奴らの基地に攻撃に向かうのだが、本拠地がわからなかったため、他の数人の部下共にスパイにいってもらっていたのだ、しかし彼のおかげで本拠地も見つかったのだよ」
あれ？確かザッカスに会いにいくはずじゃ…
イベント飛んだ？

「それと報酬だが君たちに戦力の増強もして欲しいため、先にグロスター級を渡しておこう。空母と駆逐艦だけではなにかとキツいだろう。」
うちの空母はチートだけどな。
グロスター級は拡張性も高いし、ペイロードもあるから輸送戦艦として使えるな。
「奴らの本拠地は暗礁宙域の奥にあるらしい。暗礁宙域はレーダーの効果も半減するからな。隠れ場所として申し分ない。グロスター級をこれから作るとして完成まで1日はかかるだろう。出撃は2日後を予定するつもりだ。」
「構いません。では我々は失礼します。」
「うむ。よろしく頼む」

さて、軍基地から出た俺たちは一旦ソロモン級に戻った。

事情を説明したら艦橋メンバーと各班長は俺の判断を支持してくれた。

そしてジュノー級を売り払い、ソロモン級、アルク級を改装、グロスター級の造船を始めた。

ソロモン級以外は完全な無人艦にするため、ＣＵ…コントロールユニットを搭載。
ソロモン級にはそれ兼統合統括型ＡＩ機能付きのものをつけた。
ついでに艦長室も導入。
書類仕事せにゃならんのよ…

「うは…テラ面倒…」
新品の部屋の中にあるデスクの上には、大量の書類が…

つかこればっかりは旧式なのな。え、改竄防止のため？マジすか。
「ま、やるしかないわな」
『頑張ってください！』
「おう！…え？」

…今声した？

「…疲れてるんかな」

『え？頑張らないんですか？』

…

『…？』

「…ふぅ。」

よし。ＯＫＯＫ。クールダウンや。

とりあえず深呼吸して…

女の子の声聞こえたね。しかも自分以外誰もいない部屋で…

「…みゃあああああ！？」

『！？』

「幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い幽霊怖い幽霊恐い幽霊恐い幽霊恐い幽霊恐い幽霊恐い幽霊恐イ幽レイ恐イ！ユウレイコワイィィィ！」

『ちょ！艦長おちつ…』

「にゃああ！堪忍してぇ！祟らんといて！呪わんといてぇぇぇ！」

『幽霊違いますよ！』

「なら地縛霊！？呪怨！？ツイッヤァァァァア！」

『かんちょぉぉぉ！』

そして俺が落ちついたのは一時間くらいたったあとでした

でだ。

「…統合統括型ＡＩさんなの？」

『はい。先ほど起動しましたので。まずは艦長にご挨拶を』

「おっけ。しかしいきなり初めての相手に声かけるのはやめとこうな？」

マジ幽霊かと…

『はい。』

「一応みんなに紹介の文章いれとくから。仲良くね。…名前はクォーツな」

端末をいじって搭乗員全員にメールを送る

確か石英の英名…だっけか？

『はい！ありがとうございます！』

「ん。いい返事だ。」

娘持った気分だね。

「さてと、時間も過ぎてしまったし、やりますか！」

『はい艦長！』

そして俺はクォーツの声援を背に書類と格闘を始めた。

４章　ラッツィオ編２（後書き）

今回登場しました統合統括型ＡＩはＱＯＬさんから許可をいただいております。

許可していただいて本当にありがとうございます！

5章　ラッツィオ編3

第三者視点

サウザーン級オムス搭乗艦

時刻になりサウザーン級の観測用レーダーには宇宙港付近にて待機する巨大空母…ソロモン級が率いる部隊を捉えていた。

「…では我々も出撃致します。」

「後武運を。」

通信越しに声を交わすオムスとテラー

テラーの脇にはモルポタもいた

「戦果を期待しておるよ。オムス中佐」

「はっ。」

オムス乗艦艦は他のサウザーン級やテフィアン級、アリアストア級、アーメスタ級を率いてラッツィオ軍基地から出航していった。

そのままソロモン級艦隊の前面に出て、彼らを率いる形で暗礁宙域に突入していった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ゼロｓｉｄｅｉｎ

「…砲雷班、レーダー管制班、警戒厳に。」

「え？でも警備が手薄なルートを進む話だったんスよね？それならそんなに警戒する必要ないんじゃ…」

「そうだよな。それに軍艦も一緒なんだぜ？」

いっとくけど、軍艦よりうちのレーダーのほうが性能いいからね？

「それでもさ。宇宙じゃなにがあるかわからんよ？クー、グロスターを前面に、アルク級は左右へ移動」

『了解です。』

クォーツの愛称はクーになった。もともと短いのにさらに短くなったぜ

「確かに、彼らはスパイからもたらされた情報を信じている。艦長の言うとおり警戒しておいても損はないでしょう。」

んで軍との共同戦線かつ海賊との正面衝突だ。

戦闘アドバイザーとして今回はププロネンさんにも艦橋に来てもらった。

ズドーン！

「な、何事だい！？」

「トスカさん落ち着いて…！シアンさん報告！」
謎の爆音が聞こえた。そういえば襲撃されるイベントあったっけ？

「我々の艦隊ではありません！前方のオムス艦隊のテフィアン級、轟沈！」

「け、けどレーダーには…反応なしッス！」

「ププロネンさん。どう見る？」

「…ふむ。恐らく暗礁に隠れて質量弾頭を撃ち込んできたのでしょう。」

「なに冷静になってるんだい！？軍の哨戒船はなにしてたんだい！」

「こんな暗礁宙域じゃ敵の感知は無理っスよ～！」
おっけ。トスカさんを含めて落ち着け。

「本格的に攻撃を仕掛けてくるなら暗礁から出てくるでしょう。」

「うん。ジランさん、身体を出した奴から艦中央主砲で攻撃！各側面主砲は左右から接近する艦を警戒！現れ次第撃てッ！」

「了解だ！」
ソロモンの艦中央のレーザーが火を吹き、現れつつあるガラーナ級

やジャンゴ級を撃破する。
しかし数多いな…

「うわ！本当に出てきた！しかも囲まれてるっス！？」

「サウザーン級より通信！」
『ゼロ君！聞こえるか、ゼロ君！』
オムスさんから通信キター！
「とりまオムスさん落ち着いて。」

『う、うむ。…この場の連中は我々が引き受ける。君はバルフォスを目指すんだ。ヤツさえ倒せば他の連中も戦意が消失する！』

「了解。死ぬんじゃないですよ。」
通信が切れ、俺は息を吸う。

「マドさん！包囲が手薄な地点は！？」

「正面っス！ガラーナ級四隻！」

「ジランさん！正面に全砲門一斉射、蹴散らせッ！クー、グロスター級からも放て！」

「オーライ！」
『はい！』

ソロモン級とグロスター級から一斉にレーザーが放たれる。
それは前のガラーナ級を安々と貫き破壊した。

「よし。目標に最大戦速で突っ込め！」

「了解だぜ艦長！」

アールドさんが操るソロモン級とそれに連動する艦船は包囲網を突破した。

「強襲に用いた艦隊があの数です。恐らく残っているのは直衛の艦隊とバルフォスの艦でしょう。」

「なら好都合！」

全主砲ぶち込むのみ！

「！！右舷に反応あり！オルドーネ級３、ガラーナ級４隻、ジャンゴ級５、ゲルドーネ級１！ゲルドーネ級を中心に展開っス！」

「また強襲か！好きだねぇ。」

トスカさんだいぶ落ち着いてきたね

「全艦回頭！」

「実体弾キタッス！」

にゃにゃ！？

次の瞬間、艦に振動が走った。

「きゃ！左舷の無人区画に着弾！あ、穴開きました！」

うにゃにゃ！？

「さらにアルク級二番艦中破、グロスター級も機関部に被害拡大！」

「にゃ、にゃんですと！？」

うわ、まともに動けるのアルク級一番艦とソロモン級じゃないか！

『うわーん、傷つきましたぁ！』

あ、クーはこの艦そのものだもんな。

「回頭完了！敵艦隊の正面だ！」

「グロスター級は回頭にあと3分かかりますが、各砲撃てます。」

よし…

「撃て！」

「オーライ！」

再び火を吹くソロモン級艦隊

その一斉射でオルドーネ級やガラーナ級を潰す。しかし…

「暗礁を迂回してジャンゴ級接近！次射発射まで間に合いません！」

「まずいですね。暗礁宙域での戦いに慣れてます。」

まっずい。本気でまっずい。

デフレクター積んでおけば良かったなぁ。シールドモジュールでレーザー対策しかしてなかった

「俺、この戦い終わったら全ての艦にデフレクターユニット積むんだ…」

「変なフラグたてんじゃないよ！」

トスカさんに怒られた。

ふひひ。さーせん。

「…あれ？ジャンゴ級轟沈？次々と撃破されます！」

「「え？」」

「敵のオルドーネ級からの砲撃っス。次々とジャンゴ級が落ちてるっスね」

「どうやら軍のスパイが乗っているようですね。バルフォスを撃つチャンスですな」

おーし！

「ソロモン級を前に出せ！全主砲発射！」

「オーライ！」

相手のゲルドーネ級も前に出てきた。

しかしこちらの三発の主砲レーザーがゲルドーネのミサイル発射管を貫く。

「ミサイル発射管に直撃！あ、誘爆しました。」

「たまや～！」

誘爆したようで敵艦は爆発に包まれた。

「あ、敵艦健在、宙域から離脱を図ります。…うわ早…」

砲撃する間もなく、ゲルドーネ級はミサイル発射管をパージするとどんどん離れていった。

直衛の艦隊もそれに続く。

残っているのはオルドーネ級だけだ。

「オルドーネ級より入電。スカーバレル本拠地の宇宙港にて中央政府軍を待つ。との事です。」

「よし。じゃうちらも宇宙港で待たせてもらおうじゃないか。グロスター級やアルク級は修理が必要だしねぇ」

「そうですな。では私はこれ以上いても邪魔になりますし、退室します」

「あ、ププロネンさんご苦労様ですた」

艦橋から出ようとしたププロネンさんを呼び止めて礼を言う。そしたら笑顔で答えてくれた。

『かんちょー。』
微妙に涙声なクォーツ。
いや感情豊かだね。

「安心せい。宇宙港で修理するからさ。」

宇宙港ではドロイドが無償で艦船の修理してくれる。
解体費は取るのにな。

「ついでに基地に当面留まろうか。色々探検のしがいがありそうだし。」

そう思いながら俺たちは基地の宇宙港へと侵入していった。

宇宙港はあるが、基地自体は人工惑星…宇宙コロニーみたいなもんだ。

実験開発何でもし放題。

しかもこれをジャンクとしてしまえば好きに出来るな。
…ま、一応交渉せねば。

艦からトランプ隊や保安局、トーロとティーダとともに降りるとそこにはスカーバレル海賊団がいた。

「艦長！」
「ゼロ！あぶねぇ！」
ププロネンさんとトーロが前に出る。

「おいおい、そんなに警戒すんなよ。こんな格好だが俺らは軍人だぜ？」

「あ、スパイのか。」

「そうだ。俺はディゴ、あん時は世話になったな。」

あの時…？

「わかんねぇか？お前らがゲートから出てきた時だよ」

…あー！

「あん時のオルドーネ級の！？」

「そうだ。あん時は戦闘とごまかしての情報交換してたんだがな。」

「ありゃ。じゃ邪魔しちまったか」

しかし豪快に笑うディゴさん。

「なあに。結果的に強力な味方が手に入ったんだ。結果オーライだろう？」

「あはは…」

苦笑いになるわこれ…

ま、軍人に目つけられたのは変わらないか。

「ところでザッカスさんはどこに？」
俺の一言でティータがピクッと反応する。
ま、お兄さんが心配で来てるんだしな。
「あぁ…ザッカスなんだが、ちと洗脳されちまってな。うちの船で治療中だ。ただＳＥＲＶＯＳを使われたようでな…どうにも時間がかかりそうだ。」
「そんな…どうにかならないんですか？」
「大マゼランの技術だからな…こればっかりはどうにもならない。」
大マゼランっつてもその中でもジーマエミュ行かなきゃだしな、
てかバルフォスはどうやってそんな技術手に入れたんだ。「ま、いつか俺たちが大マゼランにいって薬とってくればいい話だろ？」
「うん。」
ティータを慰めるトーロ
だがトーロ、俺は大マゼランいくとはいってないぞ？…いやいつかはいくけどさ。
しかしまたイベント壊したか。これってバグか？
「そういえばスカーバレルの連中がいないね」
「あぁ全員で迎撃にでたからな。基地内部には非戦闘員しかいない

よ。」
「ゼロ君！」
他のブロックからオムスさんがやってきた。
走ってきたようだが息が荒くないところはさすが軍人だなぁ
「良かった。無事だったか」
「そちらもご無事のようで…」
「あぁ、君たちがバルフォスを倒してくれたおかげで海賊の士気も低下してな。ほとんど逃がしてしまったが、この宙域から撤退させられたよ。」
「だがオムス中佐、ラッツィオ軍基地のテラー中佐がバルフォスに買収されてやがったんだ。」
「…やはりテラー中佐か。」
どうやらどこかでテラーを疑っていたオムスさん。
しっかし軍人が海賊に買収されるって…
「世も末だな。」
「そうだなぁ」
なんかのほほんと、し始めた俺とトーロ。
「ラッツィオ軍基地所属のザッカスはスパイとバラされ、ＳＥＲＶＯＳって薬でコントロールされちまってな。」

「そうか…。」

「ま、とにかくバルフォス艦隊は壊滅した。あとはテラーを捕まえるだけだ。ラッツィオ軍基地に急行すべきだろう。」

「そうだな。」

いや軍人で話進んでるけど、こっちの事考えてもらわんと！

「いやうちの艦、損傷が酷くてすぐには無理ですよ？」

「ふむ。ならば今後、我々も中央宙域に戻らねばならん。君たちにもやりたい事があるだろうから、ツィーズロンドの軍司令部に来てほしい。そこで報酬も渡そう。」

「了解です。」

あぁ…めんどくさい臭が…

絶対なんか頼まれる系だろ。

そのあと、俺たちから離れるオムスさんとディゴさんは非戦闘員は回収したとか、造船工廠がまだ使えたとか話していた。

6章　ラッツィオ終幕編（前書き）

今回はパロネタとしてあれが出てきます。

ではラッツィオ編最後の話！

始まります。

6章　ラッツィオ終幕編

さてさて、我々以外無人の人工惑星に留まった我々ソロモン級艦隊だが…

「おーし！そっちのラインで可変フレーム用に転用出来るから持ってこい！」

「そちらの小型艦砲のラインは使えるのである。グロスターに運び込んでほしい。」

「…なんでこうなったし。」

グロスター級が整備班と科学班の巣になりつつあった。

その様子をソロモンの艦橋から見ていた。

ソロモンの横っ腹に開いた穴は宇宙港のドロイドが直しつつあった。

アルク級も修復しつつあるのだが、整備班によれば毎回損傷すると宇宙港までにたどり着けない場合にも発展してしまうらしい。そのためペイロードと拡張性が高いグロスターをファクトリーシップとして改装…いや改造しようという事になった。

ソロモン級双胴空母から転用した技術と基地内に何故か出撃せず放置されていたゼラーナ級とそのその予備パーツを使って重力カタパルトを増設。無理やりつけたため、艦載能力はゼラーナ級と同程度だが、本来はソロモンに艦載機を載せるので問題ない。

そして格納区画の裏に艦載機や資材の加工、製造が可能な工廠区画

を配備。そして倉庫を大量配備…という感じである。
ＣＵがあるため、無人が基本になっているが、一応泊まって作業できるようにある程度は居住区画も配備している。
そしてアルク級一番艦二番艦も輸送艦とグロスターほどではないが工廠艦として使えるように改造中だ。

たださ、グロスターに運んでる連中のセリフが気になる…
マッドじゃねぇのか？あいつら？

『以上が拾った音声です。』

「ありがとう。クー」

うちのＡＩ様は優秀です。

ちなみに現在、艦橋には俺しかいない。
ロウズ出の皆とトスカさん、ティータは探索にいく保安局員とトランプ隊についていった。
許可してあるので問題ない。
ま、全員いなくなる訳にゃいかんから俺は残ったんだけどね。
他にいるのは内務があるものだけだ。

ちなみにワンさん一家は生活班と共に備蓄倉庫に見に行った。

「しっかしテラーも往生際が悪いな。」

『そうですね。オムス中佐達が帰る途端にすでにいないとは。』

実はオムス中佐が出航してから半日後、メールで報告があったのだ。

急いで帰還した時には既にテラーの姿は無し。逃亡した後だったらしく、どうやらバルフォス艦隊に合流して中央宙域に向かったらしい。

ラッツィオ宙域は安定しつつあるためすぐにツィーズロンドへと帰還したらしい。

とはいえバルフォスの残党はまだ残っているため気をつけるようにと、最後の文に付けられていた。

『あ、艦長、ププロネンさんより通信』

正面の画面にププロネンさんが移る

『艦長、実は見ていただきたいものが…』

ププロネンさんが画面から消え、ある物が映る。

…毎度思うんだが、スカーバレルってなんでこんなすごいもん。持ってるんだ。

「はぁ…ちといってくるけど大丈夫か？」

『はい。私はこの艦自身ですから。』

仕方なしに艦長席から離れて艦から降りた。

そしてそして

スカーバレル基地。格納区画

「ＳＥＲＶＯＳといいコイツといいバルフォスって大マゼランいった事あるんかな…」

「さて、それはわかりませんが…」

困惑顔のププロネンさんと俺。

なにせそこにあるのは…ネージリッド製エルフレア、プロミオン、ペルメオスの前身というか試作機というか…ムーブファーム構造の四肢を持った半人型機が存在した。

めっちゃコード繋がれて改装とかデータ吸い出しされる途中だったらしい。

「整備班長と科学班長にも報告しましたが、遅いですね」

「報告しちゃったの？！」

「「きた」である！」

顔を真っ赤にしてやってくるホロムさんとタカギさん。

「こ、これは！使える！使えるぞ！」

「これを分解して調べればムーブアーム構造を解析できるである！これで作れるである！タカギ！」

「おう！こいつをグロスターに持っていって…いやここでやるぞ！持っていく時間すら惜しい！」

「否！グロスターの格納区画であればより詳しく解析可能である！」

…なんか蚊帳の外のププロネンさんと俺。

「他いこうか。」

「そうですな。」

二人を残して戻る途中、整備班と科学班とすれ違った。

ｓｉｄｅｏｕｔ

第三者視点
ゼロ達がスカーバレル基地に留まって二週間。

グロスター級改め、グロスター／ｆｓことグロスター改、アルク級改めアルク／ｆｓことアルク改の改修が終わり、グロスター改の内部では一機の艦載機が製造されていた。

それは旗艦のソロモンを思わせるような漆黒のボディ、細身であり、各所の先が尖っており、左腕には全長に近い長さの砲を持つ全長１６．８ｍの人型兵器。それは内部にＣＵを搭載可能になっており、今グロスター改から出撃。

大型艦船格納庫を飛び回り、戦闘機のような形に変形した。

それをゼロ達はソロモンの艦橋から見ていた。

『見てください！艦長！見てくださいー♪』

嬉しそうなクォーツの声と共に…

ｓｉｄｅｏｕｔ

ゼロｓｉｄｅｉｎ

「どうであるか！新型艦載機、トーラスの実力は！」

「武装はトーラスカノン一門だが、駆逐艦主砲並みの威力…というか主砲を転用して作っている」

ホロムさんとタカギさんの説明が聞こえるが、飛び回るトーラスに目が釘づけだ。

見た目は完全にＯＺのトーラス。
性能もトーラス。
本気だしゃ、８Ｇの加速可能かよ。

しかもＣＵでモビルドールシステムも再現してる。

「ちなみにであるが整備班はこれをベースにした人型兵器を」

「科学班はこいつの変形後をベースにした哨戒機を考えてるらしい」

…まだ開発続くんかい。
ま、早くに艦載機出来たから構わないけど…

「一つ聞くけど勝手に試作機作ってたりとかしてないよね？」

「…」ピクッ
「…」ビクッ

固まる二人。

…え？なにその反応？

「…あるんだね？」

顔を逸らす二人。

「…見せなさい。オコラナイカラ！」

この後、若干記憶消えたが、ガタブル震える二人を引き連れ、いまだに使用用途のなかった格納庫へとやってきた。

そこにあったのは…

「…トールギス…だと…」

左腕に持つは装着式大口径のライフル、右腕には大型シールド

頭にはグラサンのようなカメラアイ

そして重厚なボディに大型スラスター

シールドだけ？のものだがそれ以外はトールギスだ。

「いや、名前は決まってないんだがな」

「タカギとともに作ってみたであるが、大質量のものを無理やり飛ばす仕様になってしまったため未起動のまま放置である。やはり黙っていたのはいけないであるな。」

気まずそうにするタカギさんと落ち込むホロムさん。

まぁ確かに黙っていたのは悪いが、予定より早く艦載機を入手出来たしな。無人運用可能なのも気に入った。

「うし。トーラス採用。」

「は？」
「え？」
驚いてこちらをみる二人
「本来は賞でも報酬でも渡すべきだろうけど、勝手に艦載機作って報告義務怠ってるから帳消しだね。二機分だし」
途端に輝く二人
「これからはちゃんと報告頼みますよ？お二人さん」
「「はい！」である！」
うし。いい返事だ。
「じゃトーラスの訓練シミュレーションの開発とこのトールギスをグロスター改にしまう事、この仕事を頼むよ。」
俺は少年のように輝く表情の二人を置いて艦橋に戻った。
「あ、ゼロ、備蓄倉庫の物資積み込み終わったよ。後いろんな部品とかも詰めるだけ詰んだしねぇ」
艦橋に入るとトスカさんが出迎えてくれた。
見れば皆出航の準備が出来ていたようだ。
「なら一時間後に出航、ヒメさんが出した航路通りにラッツィオ軍基地とリードを経由してエルメッツァ中央宙域に向かう！」
「「了解！」」

『艦長～？見てます？』
「うわぁ！いきなり近づくんじゃないよ！」
トーラスがソロモンの艦橋の前に着地し、トスカさんが驚いた。
ま、トーラスを操るクォーツにしてみたら自分の身体みたいで嬉しかったんだろう。
「トーラスをグロスター改に置いて戻ってきなさい。もういくよ？」
『は～い。』
そしてグロスター改にトーラスが戻る…と思いきや、ソロモンから出されたトールギスを掴んで運んでいった。

「…まぁいっか。」
そう呟く俺だった。
そして一時間後、ソロモンは出航、そのあとにグロスター改とアルク改が続く形になった。
ちなみにグロスター改に整備班の一部（タカギさん含む）と科学班が乗り込んでいるため、今は前線張れるのはソロモンだけとなっている。
まぁいる海賊は雑魚だろうし、問題ないだろう。
まずはラッツィオ軍基地にいき、ジャンクを売り払う。

新品同然だったためかなりの金になった。

ラッツィオ軍基地を出る前にはグロスター内で訓練シミュレーターが完成し、戦闘シミュ室のモジュール共々ソロモンに配備した。
そしてグロスターにトーラス製造に必要な物資を運び込んだ（整備用品として無料で貰えた。懐がデカいぜ。）ため、航行しつつ製造、随時ソロモンに配備している。

そしたらププロネンさんとガザンさんが専用機を作ってくれと科学班と整備班に頼んだらしく、通信機器を増設。背中にレドームを積んだトーラスとカノンを二丁積んだトーラスが格納庫に増えていた。
２つともそれぞれのパイロットの要望らしい。

ついでにグロスター改には哨戒機としてビトン改が積んである
エルメッツァで使われている艦載機ビトンにレドーム他、ＣＵや通信機器を積んだ偵察機だ。

科学班が筆頭となって開発したらしい。

そんな訳で…

「今日もやってるね。飛行訓練」
ソロモンの周りをトーラスが飛行形態で飛び回る。トランプ隊が乗るトーラスはもはやその手足の延長上として自在に使われている。
ただガザンは若干不満らしく、もっと火力が欲しいんだそうだ。
ま、その辺は科学班に任せるとして…

リードを出発すればいよいよエルメッツァ中央宙域だ。

まともに戦えるのはソロモンとなった今、早いとこアーメスタを手に入れねば…

6章　ラッツィオ終幕編（後書き）

ぶっちゃけトーラスでたあたりで楽しんでた、後悔はしていないっす！

7章　激闘編1（前書き）

ほぼオリジナルの話となります。

7章　激闘編1

ゼロｓｉｄｅｉｎ

リードで補給したあと俺たちはゲートを通り抜け、エルメッツァ中央宙域へと入った。

そしてパルメラで休息を取った。

なにかあったと言えば酒場でメディックの事を聞いただけなので省略

そしてやってきました。

ツィーズロンド！

「面倒な匂いがする…いきたくねぇ…」

「仕方ないだろう？あんたが報酬求めたんだから」

「無償だったらトスカさん怒るでしょ？」

「当たり前だろ？」

俺はトスカさんを引き連れ、政府軍司令部に向かっていた。

入り口でオムスの名を出したら簡単に通された、

「おお。待っていたぞゼロ君、とうとうロウズからここまでやってきたな。」
「うす。皆に助けられた結果ですよ。」
「うむ。船乗りとはそうして航海するものだ。仲間の助力を恥じる必要はないぞ。」
大きく頷いて話すオムス中佐
心なしか嬉しそうだ。
「ところでだが…君たちの力をまた借りたいのだ。」
ほらきた面倒が。
「…それは報酬の条件として…ですか？」
「いや、君たちの活動を聞いていてね。軍からの依頼として海賊狩りをして欲しいのだ。」
「海賊狩りかい？」
まぁうちのは輸送業より海賊討伐がメインだしな、別に構わないんだが…
「うむ。実はバルフォスのものらしき艦船がファズマティに向かったと報告がある。」
「他のスカーバレルの基地に逃げ込んだという事ですか？」
「うむ。」

オムスが指示すると宙域の図面が出てきた。
オムスはそのうちの辺境に浮かぶ人工惑星だ。

「ここがスカーバレル幹部、アルゴンのファズマティだ。戦力を失ったバルフォスはアルゴンと合流するつもりだろう。掃討に協力してくれるなら報酬も増やそう。それと…」

まだ続くんですかい！？
「君たちにしか頼めない…私個人の頼みだ。ある自治区同士の紛争を止めてほしい。」

「へ？軍派遣すれば簡単に終わるんじゃ…」

いきなりムードが暗くなった、そこを軽快にブレイクしたい！

「いや軍は自治区には介入できないんだよ。しかし、何故あんたがそんな事頼むんだい？」

「じつはな…私のその一方は故郷なのだ。故郷が戦乱を起こすのを見るのは忍びない…だが私は軍人であるがため、表立ってなにもできないのだ。なんとかしようとディゴを調査に向かわせたが…それくらいしか出来なくてな…」

「…ふむ。」

「上と相談し、軍によるファズマティの調査を遅らせたりも出来るのだが…」

一度スカーバレル基地でおいしい思いしてるこちらとしては捨てが

ないなぁ…
…つか結果的に軍に奪われるなら売ればよくね？
「…うし。ならファズマティをこちらが入手して軍に売るって事はどうですか？」
「あんたまた軍相手に交渉する気かい？」
また呆れ顔のトスカさん。
「だってスカーバレル倒したらその後は所有者はいない。なら俺が奪ったとすれば所有者は俺になる。違いますか？」
「ふっ…ははは！」
笑い始めたオムスさん。壊れたか？

「そんな事いうのは君が初めてだ。そうだな。確かにその通りだ。人工惑星となれば我々としても利用価値がある。いいだろう。紛争を止めてくれたらファズマティの購入を約束しよう！」
手を差し出し、握手を求めてきた、
「気前いい人は好きですよ。」
俺はそれに答え、握手する。
「さて私の話は以上だ。」
「ふぅ…報酬をもらうはずが仕事が増えたね。」

「プーよかマシでしょ？それに元々海賊は狩る予定だったし、また人工惑星で好き勝手出来るんですから、」

「ま、そうだねぇ」

ため息まじりに納得してくれたトスカさん。

「すまない。私のできる限りの礼はしよう…さて報酬だが」

あ、忘れていた。

こっちメインだったな。

「まずは礼として円滑に艦隊を運用するデータだ。エルメッツァ中央政府軍で大隊規模まで使える代物だ。」

「それは嬉しいです！」

大隊率いるとかいいよ！カッコいいじゃん！

「そして報酬の３０００Ｇとアーメスタ級の設計図だな。これは君の所望したものだ。」

そして俺は設計図とＧが入ったデータチップを受け取った。

これを端末に入れることでやりとりできるんだよね。

「ではまずは惑星ネロにディゴがいるので彼に情報を聞いてくれ。」

「うす。では」

俺とトスカさんはオムスさんに見送られ出て行った。

まずは惑星ネロ…にいくまえにアーメスタ級を作る。

敢えて漆黒に色を変えただけのアーメスタ級だがシールドモジュールやデフレクターを装備させた完全な戦闘駆逐艦である。

まぁ相も変わらず無人運用のためＣＵ装備かつドロイドの運用である。

それを四隻、まぁこんだけあれば敵なしだろう。いまの時点でも敵なしだが…

続いて惑星ネロに到着した俺たち。

酒場にいるとディゴさんとメガネ小僧がいた。

…なんだっけこいつ？

「よっす！」

「お、来てくれたか。また世話になる！」

挨拶を交わす俺とディゴさん。

ディゴさんの格好がスカーバレルのままなんて突っ込まないからな。

「ま、とりあえず仲間にして欲しいやつがいるから紹介させてくれ。」

「イネスだ。生まれはゴッソ。よろしく」
偉そうにこちらに自己紹介するイネス。
あ、そうだ。こいつイネスだ。
「ところで僕はどこに配属されるのかい？操舵長かい？航海長かい？まさか君の副官かい？」
は？なにいってんのこいつ。
「…ディゴさん。こいつクビ。」
「なに！？」
いやそりゃそうだろ。
「仮にもこっちは雇い主です。なのにこの態度、かつ自分の位置を高望みしすぎ、いくら人材不足でもこいつは雇えないですよ。」
みくだされちゃ構わんよ。
「いや…だがしかし」
駄菓子菓子もない！
「配置するならば下っ端です。それは軍でも同様かと思いますが」
「たしかにうちじゃ無理だが…あ、いやいや」

本音でたね。つまりやっかい払いだった訳だ。

「…いやごめん。ゼロ艦長…確かに悪かった」

いきなり謝られても困る件

「なんだいきなり。そんな事いっても乗せんよ？」

「いやさっきのは試させてもらったんだ。民間船じゃいきなり素人を重要な部署に配置することもあるからね。それじゃ乗る側としても信用できない。」

「…一理あるな。そうゆうことならいっか。で、君はなにが出来る？」

「…俺空気」

ディゴさんは黙ってらっしゃい！

「航海のための知識は持っているし、宙域図を見るのは得意だ。それにこのあたりは庭みたいなものだしね。」

「ふむ…」

俺は端末からクォーツを呼び出した。

『艦長なんですか？』

「すまんけど人材みつけたから登録頼むよ。配置は…航海士でヒメさんの補佐」

『了解』

「…というわけで君はこれからうちの航海士だ。よろしく！」

「あぁ！こちらこそよろしく頼むよ！」

俺とイネスはがっちり握手した。

「…ごほん。さて話入っていいか？」

「あ、ごめんディゴさん」

今まで空気だったディゴさん

ようやく本題にはいれそうだ。「で、なにをしたらいい？」

「紛争を止めてほしいんだが、なんとか中央政府軍が介入出来る理由を作ってほしいんだ、そのためにある軍師を探してほしい。」

ディゴさんは自分の端末からある爺さんの写真を出した。

「ルスファン・アルファロエン、かつて軍にいた伝説の戦略家だ。軍をやめてからは何故か軍人を避けていてな…」

まぁやめてから理由つけて利用されるのも嫌だろうしな。

「ラッツィオ宙域で見たという情報があるんだが、いってくれるか。」

「ま、仕方ないですね。では早速出発します。」
そして俺はイネスを連れて艦に戻りラッツィオ宙域に戻る準備を始めた。
この時、あいつに出会うとは夢にも思わなかった

そしてそして

ゲートを抜け、ラッツィオ宙域に入ったソロモン艦隊は、そのまま惑星レーンに向けて航路を取っていた。

「しかしなんでレーンなんだい？」

「軍に関係がなくてなおかつ、今まで行ったことがない惑星だからさ」

というのは建て前で、ルー爺さんが惑星レーンにいるだろうとわかっているので直行してるだけです。ゲームの知識で！

「ん？…ソロモンに単艦で接近する艦船ありっス。…んなぁ！？」

「どうした！？」

驚くマドさんの声に艦橋の視線が集中する

「有り得ないっス！接近中の艦船のサイズが…ソロモン並み！２００ｍ級っス！レーダーいかれたっスかぁぁぁ！？」

驚愕と悲鳴が艦橋に瞬く間に広がっていく。

そんな中、俺とトスカさんは冷や汗かいていた。

『映像でます』

クォーツの声（オペレーターはいま驚きすぎて声でない）が響くとメイン画面に接近する艦船が写った。

そこには三連砲が備わった。巨大戦艦。あるものは恐怖し、またあるものは憧れる。

それは…

「グランヘイム…大海賊、ヴァランタインか…」

まさに恐怖そのものだった。

7章　激闘編1（後書き）

ついに出てきた。大海賊。

果たして、遭遇してしまったゼロの運命は…！？

ゼロ「眼帯もいいかもなぁ…」

！？

8章　激闘編2（前書き）

オリジナル編次話です。

8章　激闘編2

ゼロsideｉｎ

「砲雷班！絶対撃つな！操舵班！全艦停止、機関班はいつでも全出力出せる準備！」

「「り、了解！」」

まずいな。こんなイベント知らないぜ。

「シアンさん。保安局に入電。白兵に備えろとね」

「はい！」

「ゼロ…白兵になると思うのかい？」

「いいや。けどあちらから出てきたということはこちらに用があるという事だろう。…これから交渉モードにはいる」

「え？ああ…」

まぁ目的は俺のエピタフだろう。あいつら狙ってるだろうからなぁ…

とっとと捨てれば良かった。

「グランヘイムより通信！」

『坊主、てめぇがゼロか？』

画面に現れたのはいかついダンディーなおっさんだった。
「そうだ。で、あんたはヴァランタイン？」
『おうよ！まずはてめぇが持つ大事なもんを頂こうか！』
「通信切れました…」
「グランヘイム接近！これは…ソロモンに取り付かれるっス！」
「マジで白兵挑んでくるか…保安局に入電、接触箇所に集めろ！パイロットは搭乗機にて待機、下手に挑発してぶっ放されても面倒だ。迎え撃つぞ！俺も向かう！」
「ゼロ！」
俺が艦長席から出ると、トスカさんが呼び止めた。
「持っていきな！」
トスカさんが投げ、それを受け取る
それは鞘に入った刀だった。
それは…
「スークリフブレード…」
「接近戦なるかもしれないんだ。あとの指揮は引き継ぐから思いっきりやりな！」
「おう！」

そして俺は艦橋から出た。取り付かれた接点はちょうど倉庫用エアロックがある地点だった
そのためその近くの倉庫にはトーロを筆頭に保安局員総勢１００人がずらっと…寄港のたび人員募集はしてたから４００人ほどの総員の４分の１が保安局員なのは多いか。これ？

「トーロ！メーザー銃はパラライズモードにしろ。」

「なんでだ？殺してしまったほ「死体の処理、やるか？」皆パラライズモードにしとけ！」

そりゃ面倒だからに決まっているが、他にも理由がある。下手に殺して相手を怒らす必要はないかんねぇ

『敵来ます！エアロック強制解放！』

「よし！うてぇ！」
トーロの言葉で保安局員が開きつつあるエアロックに一斉にメーザーブラスターを放つ。

まだ見ぬ海賊達はいきなりの銃撃に倒れた。

こっちにくるまえに撃ったから見えないけど、

「撃て！撃ち続けろ！！銃身が焼け付くまで撃ち続けるんだ！」

「「おう！」」

俺のネタに真面目に答える皆
…突っ込み欲しかった
「撃ち方やめ！…ゼロ、撃ち続けたらダメだろ…当たった敵さん壁になって奥のやつに当たらなくなるぞ？」
「あ、そっか！」
いいじゃないか。
ネタだし
「やってくれるじゃねぇか。ガキ共…」
声のする方向には青竜刀のようなスークリフブレードを持ったヴァランタインがいた。
「ここはひとつ。サシで勝負といかねぇか？」
「…トーロ、手を出すなよ？」
「やるきなのか？」
まぁ艦隊戦じゃちょっち不安が残るからな。まだこちらのほうが勝機も高い「ヴァランタイン、さぁいざ尋常にしょぉーぶ！」
「俺の刀のサビにしてやろう！」
そして対峙する俺とヴァランタイン

まずはスークリフブレードを振りかぶり、脳天目掛けて斬りかかってくる。

それに対して自分のスークリフブレードを斜めにし受け止め、受け流す

結果、ヴァランタインのスークリフブレードは俺の右横に叩きつける結果となった。

「なにぃ！」

「うりゃ！」

そしてヴァランタインの腹に蹴りをぶち込む。

「はっ…やるじゃねぇか！」

しかしヴァランタインは蹴りを食らっても平気だった。

むしろ笑ってやがる。

「うおぉぉぉ！」

蹴った足を掴まれ、天井まで放り投げられた。

「ちっ！」

天井にぶつかる前に身体をよじり、天井に着地。

天井を蹴ってヴァランタイン目掛けて突っ込み斬りかかる。

しかしヴァランタインも太刀のようなスークリフブレードを抜き受

け止めて鍔競り合いになる。
ガキィィイン！という金属音と共に火花が散った。
すぐさま弾き、地面へと着地する。
「あははは！楽しいなぁ坊主！」
ゆったりと歩きながら右手に太刀型、左手に青竜刀型のスークリフブレードを持ち近づくヴァランタイン
…正直怖いわ。
にしてもよく身体が動くな。白兵技能カンストしたっぽいか？
「だがそろそろ終わらせるとするか。」
一気に駆け出したヴァランタイン。
相手は二本、一本受け止めたとしても二本目でやられる…
せめて二撃あれば…
…二撃？
俺はスークリフブレードの鞘を見てニタリと笑い、納刀した。
「ゼロ！？なにしてんだ！」
「観念したか？楽しかったぜ坊主！」
両手のスークリフブレードを俺目掛けておろす。
しかし…

「…いくぜ抜刀術！」
鞘を抑え、片手で一気に抜き、加速された刃は青竜刀型にぶつかり、
砕く！
「うお！？」
驚くヴァランタイン。
しかし迫る二撃目
「…かーらーの！」
鞘を強くつかみ
「飛天御剣流・双龍閃！」
鞘で太刀型を叩き破壊する
「なにぃいい！」
斬撃の余波でその場で回転する俺
…すると
ブチッ
「がふっ！」

…なんだ今の音

一回転終えてヴァランタインのほうを見て驚愕した。

なんと腰にくくりつけていたエピタフがヴァランタインの顔面向けて直撃。後ろに倒れていくのだった。

「「お、おかしらぁぁぁ！」」

手下達がヴァランタインとエピタフを掴みエアロックから戻っていく

…って！

「ちょっとまてぇぇえ！エピタフ俺の！」

叫びも虚しく、エアロックは閉じていった。

「…」

保安局員共々、呆然とする中、アナウンスが聞こえた。

『艦長！敵艦熱量増大！攻撃準備に入ってます！』

グランヘイムの攻撃食らったらマズい！

「全艦撤退ぃぃ！レーンに逃げ込めぇえええ！」

俺の悲鳴混じりの叫びを聞いて艦隊は逃げ始める。

俺が急ぎ艦橋へとあがり、後方のグランヘイムを移す画像をみると三連砲からレーザーを何度も放つグランヘイムがいた。

「グロスター改中破！か、かすっただけでシールドモジュールオーバーヒート、しかもその次弾で左舷持ってかれましたぁ！」

「マジか！？」

ファクトリーシップにしたとき、後方になるから出力下げた小型版のシールドモジュール変えたのが仇になったか！

にしても一撃かよ！？

「ぜ、前方にレーンの宇宙港…あ、グランヘイム反転、離れていきます…」

「「『た、たすかったぁ…』」」

艦橋メンバーとクォーツが安堵する。

最初に艦隊戦挑んでたら死んでたな…これ。

何はともあれレーンについた。ようやく正規ストーリーに戻れるかな？

8章　激闘編2（後書き）

オリジナル編終了！

しかし思いつきでやったから短かった…。

9章　エルメッツァ編1（前書き）

通常運用？にもどりまーす

9章　エルメッツァ編1

惑星レーン

「ぶっちゃけ死ぬかと…思った」

入港後、今回は全員に休暇出した。
あの撤退の時、全員に精神的に負荷かけたので（知らないとこで死の恐怖から精神的に壊れた奴が何人か出た。ヴァランタイン恐ろべし）今回は一週間寄港、外にいるヴァランタインも一週間もすればさすがにいなくなるだろうと踏んだからだ。

ただ整備班と科学班の半数を占めるマッド連中はピンピンしていた。むしろ喜々としたという感じか

連中は今回の休暇を利用してグロスター改の工廠区画を改造するらしい。

といっても効率化するだけらしい。

そして俺も酒場に来て例の人物を探すのだが…

…いた。

白髪の髭のじいさんと子どもだ。

「おじいさん子連れですか？珍しいですね。」
近づいて話しかける。

するとじいさんもにこやかに話してくれた

「いやこの子は弟子のウォル・ハガーシェ。わしはルー・スー・ファーという者じゃ。ほれ挨拶しなさい」

「よ、よ、よ、よろしく」

もどりながらも挨拶する。

その様子に俺は若干苦笑した。

「はは、この通り話すのは苦手じゃがなかなか優秀な弟子なんじゃよ」

「そうなんですか？」

「うぅ…」

うつむくウォル、笑顔で話しあう俺とじいさん

「ところでルーさん？この辺でルスファン・アルファロエンっていうご老人を知りませんか？」

…あ、ルーじいさんの雰囲気変わった。

「…誰からその名前を聞いたかのう？」

さて…スーパー交渉タイムといこうか！

「おや、艦長、こんなとこでどうしました？」

まさかのププロネンさん！
まさかのＫＹです！

「…おや、ルスファンではありませんか？お久しぶりです」

「ははは。その節は世話になったのぅ」

まさかの知り合い！？
そして即暴露！？
ちょスーパー交渉タイムは！？

懐かしの話を始めたププロネンさんとルーじいさん。

…最初からププロネンさんつれてくりゃ良かったのか…

俺が酒場のｏｒｚしていると、ウォル君がポンポンと背中を叩いて慰めてくれた。

…君はいい子や…

そしてそして

「思い出した。ディゴ、彼はエルメッツァ中央宙域で活動していた諜報員です。その時はアル・デアと名乗ってましたがね。」

「ほほ、これまた懐かしい名前が出たのぅ」

俺とププロネンさん、ルーじいさんとウォル君は椅子に座って会話していた。

警戒しかけたルーじいさんはププロネンさんのおかげで心許してくれたようだ。

ちなみにこの二人の出会いはトランプ隊がエルメッツァに来た時、一時的とはいえ、いろいろ教えをいただいたらしい。

「じゃアル・デアが本名なのですか？」

「まさか、ヤツの本名は軍の一部の者以外知りますまい。ただ名高いエルメッツァの諜報員…その事実でヤツの能力は折り紙付きでしょう。なにせルスファンさんの居場所を突き止めた訳ですし。」

「ふむ…しかしヤツに見つかるとは長居しすぎたかのぅ？」

「あ、それでしたら」

ププロネンさんは紛争の事を話した。

…けどその中に俺の知らない事実もあるのは何故だろう…

「ふむ…ベクサ星系の資源惑星帯はいつかそうなるとは思っておったが…中央政府軍も身動き取れずか…」

「こちらとしても依頼されたので仕方ないのですが…なんとかしたいのです。お力を拝借出来ませんか？」

頭を下げる俺

「若者にそこまで言われて腰を上げぬ訳にはいかぬな。お前さん方に同行するとしよう」

「助かります！」

「またルスファンさんの教えが請えますね。よろしくお願いします。」

嬉しそうな声を上げるププロネンさんと俺

「では１０年ぶりに中央に戻るとするかの。ウォル」

「は、はい…」

二人を率いて酒場から出る俺とププロネンさん、道中ププロネンさんが惑星の滞在期間に関して説明していたが、艦が２０００ｍ級と話したら中を探検したいらしく、すぐに乗船を希望した

…見て即驚かれたが…

中に入ると艦橋に案内した。
「ほほ、これは小マゼランのものではないな。」
「ランキング報酬のものですから、大マゼランのアイルラーゼンのものです」
ルーじいさんに説明しているとウォル君がそわそわしだした。
好きにみてきていいというと走り出した
…あ、こけた。
けどすぐ立ち上がり、艦橋を見て回った。
「若いのぉ」
「あはは、」
笑うルーじいさんと俺
「ところでホログラムシステムは使わんのかのぅ…？」
「『ホログラムシステム？』」
「む？」
クォーツの声に首を傾げるルーじいさん、
そいや紹介まだだったな
「あ、紹介が遅れたんですがうちの統合統括型ＡＩのクォーツです」
『よろしくお願いします～。』
「ほほ、人格付きとは今では珍しいのぉ。しかも女性型かの？」

『あ、わかります？』

…俺も密かに思っていたが何故女性型なのだろうか？
…ホログラムシステムと女性型ＡＩか。
ルーじいさんの話だと投影システムだけは端末にもついてるらしいし
いいこと思いついた！

ルーじいさんとウォル君に端末を渡して空き部屋に案内した後、俺はコンソールを叩いた。

『艦長ー？なにしてるんですか？』

「んー？統括型ＡＩに新たなプログラムを入れるんだ。」

『…艦長えっちぃです』

「何故に！？」
そんな問答をしつつも、どんなものになるか聞いたらうれしがって

いた。

そして7日後

「あー、出発前に発表したい事があります。」

今現在、艦橋には艦橋メンバー＋ホロムさん、タカギさん、ワンさん、レインさん、トーロ、ティータがいた。

ちなみにイネスは艦橋メンバー入りしている。

困惑顔でみる一同に満足してから言った！

「今回、統合統括型ＡＩがパワーアップしました！クォーツ！ショウッターイム！」

『はい、マスター！』

艦橋の艦長席の脇に一人の少女が現れた。

それはロリっぽくなったショートカットの弱音ハク…

まぁぶっちゃけ鏡音リンの体格＋ＭＥＩＫＯの顔＋弱音ハクの服と髪色っていう…

まぁ俺がそう設定したんだけどな（笑）
最初は体格もＭＥＩＫＯとか弱音ハクにしようかと思ったが性格的にあわなかった。
性格ロリだもんな…うちのお姫様…
何故か艦長からマスターになったし

『ソロモンの人格付き統合統括型ＡＩこと、みんなのクーちゃんです！』
くるっと一回してウインクしてキラッとした。
…つかマジで星出た…

「おぉ…すげぇな」
「科学班として艦長を尊敬するである」

尊敬の眼差しを浴びる俺
…しかしそれはクォーツの一言で殺意に変わる

『…初めての相手はマスター…いやお兄ちゃんでした。』

「「な、なにぃぃぃ！？」」

「はぁあああ！？」
前者皆、後者、俺

いきなりなにを言い出すのやらうちのお姫様！

トスカさん！いや全員メーザーブラスター降ろせ！
ヴァランタインより怖いぞ皆！

そしてティータ&イネス！そんな冷めた目でこっちみんなぁぁぁ！

『ってタイトルデータがタカギさんの端末にありましたけど、あれなんですか？』

「へ？」

固

ま

るタカギ

『タイトル画像がおじさんと幼子でしたよ』

「…」

離

れ

るホロム

「うわ…ロリコン…いやペドである…」

「…はあああ！？ホロム、何故離れたぁぁ！」

「来るなである！来るであるぅ！」

「待てや！このアマ！」

逃げるホロムさんと追うタカギさん…
つかホロムさん女だったのか…
いつも小汚い格好だから分からなかった…

『…あれ？ボクの歌は？』
「また今度だな」

…いつの間にか、ボクっ子になってるし
その後しばらくはタカギさんはロリコンもしくはペドと呼ばれたのは余談である。

そして時たまソロモンの各所で歌が流れ、士気が向上したりなど、クォーツの歌で色んな効果があがったりした。

『…誰でもなく、君のために出来ること、僕は想う。僕は願う真っ直ぐにー…』

それで気づいたんだが、クォーツって水樹奈々ボイスなんだよね。
たまたまなのか太古のデータがあったのか…

真実は闇の中である。

「…いつ聞いてもいい声ですねぇ」

「心洗われるとはこの事ッスよ」

今は航行中につき、マドさんとシアンと俺が艦橋にいる。

他の皆は食事中である。

『ありがとうございます！』

「さて、一旦歌は中断。ゲートに入りエルメッツァ中央に戻るよ！！」

「「『了解』！」ッス」

ソロモン艦隊はゲートへと突入していった。

9章　エルメッツァ編1（後書き）

さて、今回のパロディネタはいかがでしょうか！

ホログラムシステムはオープニングムービーでデラコンダが出てたあれです。

さて次回もお楽しみに！

１０章　エルメッツァ編２（前書き）

最後のほうに微エロ入ります。
ご注意を？

１０章　エルメッツァ編２

エルメッツァ中央に帰ってきた俺たち。そんな中一度パルネラで寄港後出港した時だった。

「ちょっといいかの？」
艦橋にルーじいさんがやってきた。

「どうしたんです？」

「うむ、策がまとまったのでわしらをドゥンガへ送ってくれんかの？」

「了解です。イネス、ヒメさん。進路変更してドゥンガへ、今回は有無言わさず最大加速でＯＫ！」
「わかったわ。なら通常の倍のアイキューブ・エクシード推進に設定するわね。イネス君機関班に通達よろしく！」

「は、はい！」

アイキューブ・エクシード推進
インフラトン・インデュース・インヴァイターを主機関としたこの世界では一般的な推進手段

ようはめっちゃ早く最大移動速度は光速の８７６倍らしい。
けど通常の航海者は２００倍を上限設定としている。何故なら機関に負担をかけるからだ。ちなみに通常の倍なので今回は４００倍で行くことになる。
ただし機関に負担かかるため本当に遠くが目的地の時だけやるのだ。

「うん、およそ1日でつくわ。」

『早いでしょー？えへへ』

まぁ機関を手に入れた俺のおかげなんだけどね。

そして足早にドゥンガについた俺たちはルーじいさん達を降ろして、策が終わるまでドゥンガとアルデスタ間で海賊狩りを始めた。

どうやら紛争準備のため人員や物資を載せた輸送船を襲うため結構な数がいた。

「前方敵海賊艦隊、ガラーナ級1、フランコ…？いやジャンゴ級2、ジャンゴ級はアルデスタ軍の輸送船にとりついてます。」

艦橋のメインには輸送船を挟むように接舷したフランコ級二隻とその正面で砲門を向けていたガラーナ級がいた

「ならトランプ隊のトーラス発進、ジャンゴ級を狙うよう通達、アーメスタ級3、4番艦はグロスター改艦隊の護衛とし、1、2番艦は本艦とともにガラーナ級に向けて砲撃！」

「了解、トランプ隊発進してください。輸送船の支援お願いします。

」

『了解です。トランプ隊発進します』
オペレーションに返事するププロネンさんの声が響く

右側のカタパルトからトーラスが何機も発進していく。
計３０機発進したトーラスはそれぞれ１５機ずつに別れ、それぞれ人型に変形してジャンゴ級にトーラスカノンを照射していく。

出力を抑えたのか、威力が低下している
それでも士気を削ぎ武器を破壊するには十分だった。
もちろんソロモンとアーメスタ級二隻からの攻撃もあり、　ガラーナ級は被弾し、吹き飛んだ。

いやー早かったね。

クォーツが着弾収束型管制システムのような事してくれたので最近は命中率がかなりいい。

「艦長、海賊は降伏、船を捨てて脱出艇にて逃げ出すようです、それと輸送船から礼文が届いてます」

「ＯＫ、海賊船のほうはこちらでグロスター改のトラクタービームで引いていくとするか。」

離れていく輸送船を見送りながらグロスター改で
引っ張る準備をする

「あ、スカーバレルのゼラーナ級接近中ッスよ。単艦ッス」

「様子がおかしいねぇ…救援の数じゃない」
トスカさんの疑問ももっともだ。
「あ、敵艦より入電。」
『そこの艦、『黒』か？』
「『「黒？」』」
『なんだ知らないのか？ラッツィオのスカーバレル基地を壊滅させ、今は中央を謎の巨大戦艦を旗艦とした艦隊だよ。旗艦と艦載機は黒を基調した色だから『黒』ってスカーバレルでは呼んでいるんだが…知らなかったのか？』
…それ明らかに誇張されているけどうちの艦隊だよな…
しかし黒って…短い呼び名だな
「なら多分俺たちが黒だな。んで？」
『あぁ！お前ら海賊狙ってるならこの艦への攻撃は止めて欲しいんだ。これからルッキオの義勇軍に参加するところなんでな！』
「ふむ…いいだろう、ただ他のは狙うぞ？」
『構わないさ！じゃあな！』
「ガラーナ級離れていくっス」
「しっかし義勇軍ねぇ…よくある話だが紛争で海賊が自分からいくなんて…」

珍しいのだろうか？よくわからん。

『ルッキオルッキオ♪本気になったらルッキオ～♪』

瞳を閉じて歌うクォーツ。

「なんだい？それ？」

『最近ルッキオやドゥンガの周辺宙域で流れてるＣＭの歌ですよ？あらゆる投稿サイトに飛びまくりです。』

投稿サイトってＹｏｕＴｕｂｅとかニコニコみたいなもんか？

「ルッキオだけかい？アルデスタ軍のもあっても良さそうだけど…」

『ルッキオばかりですね。しかも投稿者は皆同一人物です。』

「…ふむ。一旦ルーじいさんに様子を聞きにいくか」

原作通りならあのウォル君の策な訳だが…

「了解、ドゥンガへの航路算出します。」

ソロモン艦隊はまたドゥンガへと走っていった

惑星ドゥンガ

今回は休暇は無しである。紛争前なので勧誘がひどいのよ…

そして酒場

今回はププロネンさんが同行している。

「おぉ…ここじゃここじゃ」

「どもっす」

「ルッキオ軍が増強しているようですが…」

話しながら近づく俺とププロネンさん

「それでいいんじゃよ。器に過ぎた料理をもればその器は砕け散る…」

「どうゆう事でしょうか？」

「なるほど…」

首を傾げるププロネンさんと頷く俺

「ワシとウォルは今まであらゆる手を使いルッキオ軍が兵を募っている噂をばらまいたのじゃ、おかげで海賊やごろつきが大量にルッキオ軍に流れ込み今では軍の内部で暴動や略奪が起こっておる」

「しょせん連中に軍規など、馴染めないでしょうからね」

俺の言葉に頷くルーじいさん

「連中を味方したルッキオ軍も手を焼いておっての、奴らの制圧という名分があれば…」

「中央政府軍が動ける…」
つぶやくププロネンさん

「うん、正解。そうですよね？ルーさん」

「うむ」
ニコニコするルーじいさんは立ち上がり

「これはウォルの発案での。もうすでに軍師としての力を発揮し始めておるよ」

「ほぅ…」
「へぇ…」
意外そうなププロネンさんに対して俺は感心した、原作で知っていたといえ、実際に目にすると凄いな。

「さて、いこうか？ルッキオ軍のごろつきどもと民間人が戦ったという既成事実が必要じゃからのぅ。それから連絡せねば中央政府軍は乗り出せまい？」

「確かに…」

「では行きましょうか！」

「よいか？スカーバレル艦のみを落とすのじゃ。正規軍に手を出してはいかんからのぅ？」

「ういっす」

俺とププロネンさんはウォル君とルーじいさんを引き連れてソロモンに戻った。

ソロモン艦隊はルッキオに向けて発進。ベクサ星系まで突き進む。

「ルッキオ周辺に到着」

「向かってくる艦あり！テフィアン級を旗艦にジャンゴ級８、フランコ級４ッス」

「ほほ…なかなかの艦隊じゃのう。」

ルーじいさんは戦闘アドバイザーとして艦橋に来てもらった

「…まずいぜ。艦長…テフィアン級が前に出ていて一斉射撃したら落としてしまう。」

とジランさんから報告が

…まずいな。となるとトーラスでやるしか…

そんな時だった。

「ほほ…ならばこの老いぼれの策を一つ教えてやろうかの。誰かわしの端末にレーダー情報と解析データを送ってくれんか？」

『わ、わかりました！』

クォーツが敬礼しつつルーじいさんの端末に情報を送る
「ふむ。敵陣後方に廃棄された資源衛星があるの…砲雷班、そこに二、三発。レーザーを撃ってみなさい。」
「お、おう。」
ソロモンから主砲レーザー三門から放たれる
直撃した資源衛星は爆発し、瓦礫が吹き飛んでくる
…するとどうだろうか…
旗艦のテフィアン級がデフレクターで防ぐ中、瓦礫を避けるようにスカーバレル艦である水雷艦が前面に出てきた。
「これぞ。陣形無効化じゃの。」
「…す、すごい…」
陣形無効化って実際やるとこうなるのか…
「ま。そうそう出来る技じゃないがのぅ」
「あ、テフィアン級、敵陣後方に…ッス」
「しゃあああ！撃つぜ撃つぜ！」
大興奮のジランさん。
ソロモンの主砲副砲が何度も火を噴く。
ストレスたまってんかなー…
「…やり過ぎッス。テフィアン級以外破砕粉砕大喝采ッス」

「…正直すまん。」
テフィアン級の前方がデブリ地帯と化していた。
「…ま。いいさ。次はベクサ星系だ。シアンさん、中央政府軍に救難信号出して」
「わかりました」
デブリ地帯を迂回しつつ次はベクサ星系に向かう

ｓｉｄｅｏｕｔ

第三者ｓｉｄｅ

政府軍司令部

ある一室に呼び出されたモルポタ…オムスの上官である彼は作戦指令室に入室した。
「お呼びですか？ルキャナン軍政長官」
中で座り待っていた男は口を開いた。
「うむ…ベクサ星系に君の１１７艦隊を派遣する。出港の準備を始めたまえ」
「し、しかしそれは自治権の侵害では…？」

ベクサ星系は自治領が納めており、しかも紛争直前である。
彼としては非常に行きたくはない。

「目的はルッキオ軍の一部分子による暴動の鎮圧だ。紛争介入ではない。…両国が示威行動と受け止めるのは勝手だがな…」

「…」
唖然とするモルポタ
彼としてはルキャナンの言う事ほどうまくいくとは思えなかった。
「どうした？急ぎたまえ」

「は、はっ！」

モルポタは急ぎ退室した

ｓｉｄｅｏｕｔ

ゼロｓｉｄｅ

「…うわぉ」

ベクサ星系に到着し、数回の戦闘を行い、資源小惑星の影に艦隊を隠して休息を取っていたら多数の艦隊が押し寄せた。

中央政府軍である。

数回の広域放送した後、瞬く間にスカーバレル艦を駆逐、紛争を停戦に導いた。

余談であるがこの後、アルデスタとルッキオ両国は中央政府による調停を受諾、協定を結んだという

その最中俺はというと…

「よし、ちょっと資源貰っちゃおう。」

『は～い』

クォーツ操る無人トーラス軍団で資源をグロスター改やアルク改にいっぱい積み込み、ソロモンに研究用分の量を積み込んだ。

艦橋メンバーに若干呆れられた

そして俺はルーさんに礼を言い、彼の要望によりアルデスタに寄港した。

そして…

「え？降りる？」

「うむ…わしの力を必要とする場面は終わったようだしのぅ」

確かにそうだ、しかしこの人が降りるのはだいぶ先、しかもドゥンガじゃあ…

「構いませんが…なぜですか？」

「この艦隊は軍との結びつきが強いからのぅ…わしらの居場所がバレるかもしれんのでな」

「確かに…」

結構協力してるもんな…
「うむ…世話になったのぅ」
「さ、さようなら」
こうして二人は艦隊から去った。
しかし別れの次には新たな出逢いもあるわけで…
その二日後
艦長室
『艦長？艦内の倉庫付近に科学班と見知らぬ女性がいます』
艦長室で溜まった書類片付けていたらクォーツから報告がきた
「…見知らぬ女性？なんで倉庫に…」
『ベクサ星系で研究用レアメタル入れた倉庫前ですよ』
「…あ～。読めてきた。」
アルデスタ、レアメタル、研究といったらあの人だな…
「とりあえず現場にいく…」
『わかりました』
俺は艦長室から出て行った。

「ベ、ベノサイトがこんなにたくさん…しかもすぐ脇に解析室があるなんて！」

「どうであるか？」

「ぜ、ぜひ！こちらからお願いしたい！」

あぁ…科学班数人とホロムさん…か？
綺麗な格好しているためか、他人に見える

一言で言えば美人だ。そしてサラシでも巻いてたのだろうか。男に見えた要因でもあったなにもない胸はその存在感を増していた。
一言で言えばデカい。あえていおう。爆だ。

対する興奮してる女性は藍の長髪に白衣だ。

…ナージャ・ミユさんである。

「あ、あのホロムさん？その格好…」

「おや艦長、もしやこれであるか？いやはや、愛用のさらしがついに切れてしまってな？」

手で掬いあげるなぁぁぁ！下から持ち上げるなぁぁ！頼むから！なにをとは言わないが！

「い、いやそれはどうでもいいけど…」

男としては非常に興味あるが！

「その女性は？」

「うむ。この人はアルデスタの国立科学研究所のナージャ・ミユさんである。レアメタル研究に関しては名実ともに腕が高い。なのでヘッドハンティングしたいのである。」

とりあえず持ち上げた手を下げろ！頼むから！

「…うん。その件は任せた。」

俺は鼻を押さえながら立ち去った。

その後…

「あ、おーいホロム…ガベラッ！」

「む？どうしたであるか？ペド」

「そ、それいうんじゃねぇ…それとそれから手ぇ降ろせ…」

「どうでもいいが鼻から血すごいである。こけた時に鼻うったか？」

「…だから強調させてる手ぇ降ろしてくれぇぇえ。」

「？」

タカギさん…俺よりウブかい？

そしてホロムさんは艦橋メンバー女性陣により新たなサラシをゲット。その凶悪なものをみた男性は科学班とタカギさん、俺だけらしい。

その後タカギさんのホロムさんに対する態度がだいぶ変わったのは余談である。

間章　???編（前書き）

短いです。

読み飛ばしても可！

間章　???編

???side

「確立スルハズダッタ観測者データ改竄…対イレギュラー用ファージ…襲撃者確立」

「出現箇所…カルバライヤ・ジャンクション」

「思考コントロール。良好」

「追跡者…投入」

「デハ、目標を対イレギュラー二設定、」

「イレギュラーヲハカイセヨ」
「イレギュラーヲハカイセヨ」
「イレギュラーヲハカイセヨ」

「…謎ノハッキング、アリ」

「イレギュラー発生！イレギュラー発生！」

「マタカ…」

「襲撃者ノデータ改竄…限界を越エ、イレギュラーヘノ執着が上昇…」

「マサカ！我々ノギジュツをコエルノカ！？」

「ハッキング終了…」

「追跡者以外被害無シ」

「…ナンナノダ。イッタイ」

ｓｉｄｅｏｕｔ

？？ｓｉｄｅｉｎ

白い空間に真っ白い装束を着た女性がいた。

「無双ばかりでは飽きるからの…ライバルを投入してやる。さぁ。妾を楽しませろ！」

女性が高笑いを上げると彼女の背に５対の白翼が生えた…

間章　???編（後書き）

さて、イレギュラーな存在についに対策を始めた謎の連中！

…わかる人には正体わかるんだろうなぁ…

１１章　エルメッツァ編３（前書き）

いよいよファズマティに侵攻です！
では１１章始まります。

11章　エルメッツァ編3

結果からいうとミユさんが仲間になった。
イベント変わってしまったが構わない。と思う

まぁそれはおいといて。
今ソロモン艦隊はゴッゾに向けて移動している。

「砲雷班！目標標準…撃て！」

「整備班、シフト変更してください。」

「左舷よりガラーナ級接近ッス！…あ、トランプ隊により沈黙…脱出艇確認、敵艦隊クリアッス！」

「ふぅ…」

『グロスター改で捕獲船を牽引します』

これでアルデスタを出てから七戦目…さすがに艦橋メンバーにも疲労が見えてきたな。

…一度どっかで休みを取らないと…
もしくはゴッゾにつけばいいんだけど

「…ヒメさん。ゴッゾまではあとどれくらい？」
「…そろそろ目視出来でもいいんだけど…あ！」

ヒメさんの声で皆の視線が前面モニターに向く

そこには徐々に大きくなる惑星があった。

「あれがゴッゾ。僕の生まれ故郷さ」

イネスの声にようやく休息できると皆安堵した

そしてそして

惑星ゴッゾ

その後戦闘も無くゴッゾについた。

いつも通りジャンクと牽引してきた船を売り、全員に休暇を出した

次はいよいよファズマティだ。

英気を養ってもらうとしよう。

…けど…

「…メインメンバーがなんで全員酒場かねぇ？」
酒場に来てみれば…
「「わーれはそらのこー！」」肩組んで飲みまくるシアンさとヒメさん。

「俺の酒が飲めねぇってのか！？」
「ちょっ…やめっ…ぐぶっ」
ジランさんに口に酒瓶突っ込まれているマドさん。
「…タカギは発想がすばらしいである…」
「…おーい。誰だこいつに酒飲ませたの…」

若干引いているタカギさんを口説いているホロムさん。
「だめぇー！」
「よいではないかよいではないか！」

トスカさんに服剥がれているイネス。

「「うおお！ガザン姐さん１０人抜き！」」
「次は誰だい？」
腕相撲しているトランプ隊。

「大丈夫？トーロ…」
「…むり」
ぐったりしているトーロを介抱するティータ。

…うわカオス。

「ふむ。皆羽目を外しておるの。」

「…ホロムは私の歓迎会と言っていたのだけど…」

離れたとこで酒を飲むレインさんとミユさん

…に乱入したホロムさん。

「ほれミユ、もっと飲むである。ほれ一気」

勧める手には酒瓶…しかも未開封

「…だから誰だホロムに酒飲ませたの!?無茶ぶりしてるじゃねぇか!」

叫ぶタカギさん

「うひょひょひょ」

「うぅ…なぜ…」

ナース服着せられたイネス

胸に膨らみあるがパットか?

「…そういえばここらでイベント要員がいるはずだが…」

またバグか?ここらで少女が現れるはずだが…

名前は忘れた。

「さぁ野球拳であるぅー！」

「やめぇぇえい！」

…ホロムさんの暴走を見て足早に酒場から立ち去った。

そしてその翌日。イネスは拉致される事なく帰還。
ただし主要メンバーがほとんど二日酔いのため、休みを延長した。

ホロムさんに至っては記憶飛んでいる。
そんな訳で…

「やってきましたグロスター改！」

「なにいってやがんだ？艦長…」

叫んでみたらタカギさんに冷ややかに見られた。

そう。今俺はグロスター改にいる。まだ来てなかったし新型開発中らしいからその視察だな。

「艦長、やっぱエルメッツァだけにいるって訳じゃないだろ？それならちと頼みたいんだが」

「なんだ？改まって…」

まぁ確かにカルバライヤやネージリンスにもいくけど

「今、科学班と一緒に思案してる新型なんだけどよ。どうにもエルメッツァの技術だけじゃどうにも目標水準にならないんだ。だからカルバライヤの艦船の設計図やネージリンスの艦載機の設計図を買ってもらえんかね？」

「いいすっよ」

「早！？」

即答で返す俺に驚くタカギさん。

元々カルバライヤの艦船は作る予定だったし、艦隊の戦闘能力あがるんなら構わないしね。そんな事よりもだ。

「さていろいろ案内してもらおうか？」

「いいぜ。俺も部下全滅して暇だからな。」

整備班は機関班と一緒にタカギさん除いて全員でゴッゾの山登りにいったんだそうな。

結果。筋肉痛でダウン。

どちらかといえば筋肉質な連中（女性除く）もいるのに全員筋肉痛（女性含む）とは…どんだけ登ったんだ？

というか本当に今、全然機能してないなうちの艦隊！

「はぁ…まともに働いてるのは一部の人員にタカギさん、レインさん、ミユさん。イネス、ティータにワンさん一家か…」

「…艦長、真面目な話だが医者雇おうぜ？医務室があるのにいねぇのはおかしいだろ」

「…違いない。」

ぶっちゃけ、今回はマジで医者の必要性を感じたね。

そしたらそしたら

俺はタカギさんと共にグロスター改の中を見て回った。

いやぁ、ほこりかぶったトールギスみたときは涙出たね。うん…

そして今は工廠区画で製造される途中のトーラスをみていた。
管理担当までダウンしてるから今は止まってたが、
「…とまぁこんなもんだ。休暇終わる前には無人機も揃うだろうよ。」
「助かるよ。次はいよいよファズマティ…スカーバレルの本拠地だからね。」
今回はソロモン艦隊のみなのだ。
厳しい戦いになるだろう。
「勝てばまた人工惑星いじり放題…だろ？ワクワクすっぞ！」
「ま。なにが出ても驚かんよ俺は…」
絶対スカーバレルは大マゼラン行ったことあると思う！
「んじゃ俺は艦載機の設計に戻るわ。じゃあな艦長」
「ういっす。ごくろーさん」
立ち去るタカギさんを見送り、グロスター改から降りた。

四日後

結局さらに休暇を取ったソロモン艦隊はファズマティに向けて出港した。

「…前方にメテオストームッス。」

『全艦デフレクター起動、』

「メテオストームに突入します！」

ランキング報酬の強力なデフレクターのおかげでメテオストームはなんなく突破できそうだ。

ただ過度な負荷かかりまくりだから赤いランプついているし、アラートなりまくりだけどな！しかも揺れも半端ねぇ！

「ぅ…もう無理…」

「どうしたのシアン？…まさか誰かの子を…？」

「んなわけないでしょ…酔うのよこの揺れ…」

「確かにッス……ん？」

マドさんがなにか見つけたようだ。

「どうした？」

「メテオストームの向こうで救難信号ッス。…これはメディック艦？…なんでこんなところに…」

「…メテオストーム突破…艦長ごめんなさい！」

メテオストームを突破するや否やシアンさんはオペレーター席から立ち上がり、艦橋から出て行った。

まぁそれはともかく…

「なんでメディック艦が…罠かなにかか？」

「だとしたら機雷群も置いたほうが効果的ッス。けどそんな反応無いっスよ」

「…一応調査するか…接舷させて無事な人員で探索。トランプ隊も同行させて。」

『わかりましたー』

シアンさんがいないので変わりにクォーツが伝令を出す。

俺は結果を待つだけだ。

つまり、暇。

「垂れますねん。」

『のわわ！艦長席のコンソール全ロック！』

コンソールの上でぐったりする俺

クォーツがコンソールをロックしたので誤作動は無しッス

「「「なにしてっ…あ！」」」

「こんの…バカがあぁぁ！」

「ふにゃんっ！」

艦橋全員から怒りの声があがりそうになったと思ったらトスカさんからメーザーライフルが飛んできた。

弾ではなく銃が…

「コンソールの上に乗るな馬鹿！」

「…ごめんなさい。もうしません」

『…とかいいながら何故乗るんですか？』

コンソールの上で土下座してみる。

「…なにこれ。」

「…さて。そろそろ終わったかな」

シアンさんが戻ったので真面目に戻る

『あ、艦長、ププロネンから通信』

『艦長、艦内は無人、戦闘痕や血痕がありますが、微量ですのでスカーバレルに拉致されたと想われます。』

「メディック襲っちゃいかんだろ…急いで助けたほうがいいな…ありがとう。すぐさま引き上げて」

『承知』

さて…どうしてやるか。

「あ、コンソールのロック解いて、それと派遣した連中が帰ってきたらファズマティに向けて出発」

「「「あいあいさー」」」

ただの襲撃から救出まで追加された俺は頭を抑えてため息をついた。

「…ファズマティ防衛隊の第一部隊を捕捉ッス。ジャンゴ級１０、フランコ級１５、ゲルドーネ級３…うち一隻は赤いカラーッス」

しばらく進むと人工惑星が見え、それを守る艦隊がいた。

「赤いゲルドーネから通信、」

『ほほーい』

陽気なじいさんが現れた

「ほほーい」

敢えて陽気に返事を返す俺

『兄弟から聞いていた通りきおったきおった、おちびちゃん。それっ、一気に揉みつぶしてしまえっ』

「通信きれました。」

「…、なんだったんだ？」

「っ！敵全艦ミサイル発射ッス！」

前方画面から白いのが大量に増えた

「…あれがミサイルかぁ」

…じゃなくて！

「全艦デフレクター最大！レーザーで撃ち落としつつトランプ隊と無人機トーラス発進！」

「「了解！」」

ドドン！

と振動は来るが以前スカーバレル基地で喰らったほどではない。

「ミサイル着弾、アーメスタ級群に各種被害を受けましたが大した事はありません。ソロモンもダメージありません。」

『トランプ隊展開完了。各機。敵艦隊に向けて移動開始』

…いちいち面倒なのでもうＭＡとかＭＳと呼称するＭＡ形態で宇宙に飛び出たトランプ隊は突っ込んでいった。トランプ隊以外の無人機トーラスは艦隊周囲に展開。対空迎撃を行わせる、トランプ隊のトーラスはフランコ級やジャンゴ級の艦橋や機関部を的確に狙い、沈黙させていく。

そこにソロモン艦隊の艦砲射撃が貫き、留めを差していく。

…まぁ射程距離はこちらが長いしな。こっちはミサイルさえ気をつければ落ちはしない。

しかも相手は対空兵装を搭載していないのだろう。トランプ隊が好き放題している。

「…敵艦隊、後退を開始ッス…といっても残ったのはゲルドーネ級２隻ッスけども」

ゲルドーネ級が一隻、ゲルドーネ以外を沈黙させたトランプ隊に取り付かれた瞬間、ミサイル発射管をパージして後退した。

「…無理に追う必要はないさ。それより一旦休息とトランプ隊と全艦に伝えて…そうだな。５時間ほど、小惑星の影に隠れようか」

「オーライ。じゃ移動するぜ」

「了解。トランプ隊、帰還してください。全艦、五時間の半舷休息となります。繰り返します…」

シアンさんのアナウンスが流れる中、俺はファズマティを見据えた。

休息の後、再び侵攻を始めた。

そしてファズマティ防衛隊の第二陣…最終防衛ラインにたどり着いた。

「…防衛ライン二本って…」

「意外と数減ってるのかねぇ」

まぁ確かに思ってたより少ないな。

「…ジャンゴ級１０、ガラーナ級８、ゼラーナ級５、オルドーネ級４、…なんでバウズ級重巡洋艦がいるんッスか！？」

カルバライヤの艦船か…
拡張性やメンテナンス性を重視したエルメッツァ製艦船に比べて火力、そしてその国事情から装甲が段違いらしい。
「いいなぁ…バゥズ級」
「「は？」」
羨ましいがってる場合じゃないな
「バゥズ級およびガラーナ級から艦載機の出現を確認ッス。全機ティオンッスね」
確かに小さな光点が見える。
…艦隊の攻撃は来ないか
「…艦砲で牽制しつつトーラス発進。」
さすがに取りつかれたらヤバい。まだ対空兵装ないからなぁ。
展開したトランプ隊がドッグファイトで的確に敵ティオンを落とす中、無人機トーラスはＭＳに変形して定位置迎撃に勤める
「無人機トーラス、５機目撃破されました。」
「敵ティオン駆逐まであと少しッス。射線上に味方トーラス無し。」
「よっし！主砲撃つぜ！」
ソロモン艦隊から離れたレーザーが敵艦隊を貫く

ジャンゴ級とゼラーナ級を駆逐していく。
そのうちにティオンも撃破していく。
そしてトランプ隊のトーラスは艦隊に向かっている。
「ガラーナ級、ゼラーナ級共に殲滅。あとはオルドーネ級とバウズ級ッス」
「よし…ならバーストリミッター解除！」
「りょぉかい！第一、第二リミッター解除！いっけぇええ！」
最大火力で放たれるレーザー。
オルドーネ級はレーザーに貫通され、バウズ級はレーザーに耐え、艦後方に被弾、反動で傾いた影響で艦前方が浮かび上がるとそこに被弾、まるでアッパーされたように喰らい。一回転した。
「…うわぁ。」
「あれは中身ぐちゃぐちゃだろうねぇ」
そして最後にバウズ級の艦橋を貫いて沈黙させた。
「敵防衛ラインクリアッス！」

「さて…ファズマティをいただこうか」

「うわ、わっるい顔してるねぇ」

ふふふ。ファズマティが金の塊にみえるずら、

「各艦宇宙港に入港します」

「保安局員は白兵戦に警戒してください。」

ソロモン艦隊は宇宙港にはいった

さて…はじめようか

１１章　エルメッツァ編３（後書き）

戦闘に満足いかない今日この頃です。

でも全力がこれなんですよ

１２章　エルメッツァ編４（前書き）

またまた今回パロネタ来ます！

乞うご期待！

12章　エルメッツァ編4

さて宇宙港から軌道エレベーターを降りて基地内に入ったがさすがに今回は敵が多い。

俺もメーザーライフルを二丁抱え、腰にはスークリフブレードを差して戦線に参加している

そして何故か砲雷班も参加、狙撃用のメーザーライフルで戦列に参加。

狙撃しまくりである。

「ひゃっはー！」

ジランさんがスッゴいハイテンション…

「…保安局員より砲雷班のほうが活躍ってどうよ。」

「…パイロット陣もすごいぞ？」

トーロと対談する俺

そう、トランプ隊もすごかった。

活躍の比率でいうとトランプ隊が5、砲雷班は3、保安局員が2といったとこだ。

「…じゃ保安局員はついてきて、」

「どこいくんだよ？」

「牢屋」

さすがにうちの連中だけじゃ効率悪いからなぁ。

反乱させるのよ

俺は海賊の奴を一人捕まえて殴って牢屋の場所をはかせた。

保安局員は震えてたし、海賊の奴はマジ泣きしてたけど、なんでかねぇ

「…お前、ドSだろ」

はて。何のこっちゃ？

そして牢屋

そこにはメディックの人二人や民間人、何故かエルメッツァ軍人が

いた。

彼らはどうやらスカーバレルと戦闘して敗北、その後捕まったらしい。

彼らには海賊から奪ったメーザーライフルを渡したらそのまま戦列に参加しにいった。

戦力ゲット！

それより問題はメディックの人だが…

「…思ったより少ない」

「はは…まずは礼を言わせてくれ、私はバジル・ファマ、こっちは娘のルンだ。」

「ありがとう！！」

「俺はゼロ、他の方々は？」

「皆は他の牢屋だろう。それぞれ別のエリアに隔離されたからね」

「軍人さんもだからさっきの人たちも助けにいったんじゃないかな？」

海賊に敵対するなら構わないさー。

「とりあえずお二人はうちの艦までお連れします。」
「うん…お願いします。」
「よろしくねー！」
バジルとルンは保安局員に連れられいなくなった。
『かんちょー』
「ん？」
端末からクォーツの声が…
『げんじょーほうこくです。現在３２パーセントほどクリア、脱獄したエルメッツァ軍人のおかげで順調です。』
「了解だ。」
早いかは知らんが…
『そして艦長のいる隣のエリアに熱源あり。気をつけてください。』
「りょーかい…って何故そんな情報を！？」
明らかに艦から得られる情報じゃない！

「タカギさんとホロムさん筆頭に整備班と科学班がシステム強奪のためハッキングを掛けています。ので教えてもらいました」

…うちの科学班と整備班パネェ

そしてＡＩ姫様もパネェ…

「じゃ仕方ないから俺とトーロ、保安局員で制圧する。」

「おうよ。」

俺たちは隣のエリアに向かった。

そこは格納庫になっていて…何故かバゥズ級やサウザーン級があった。

「ち。こんなところまで！」

「やぁってやるぜ！」

「のわ！」

いきなりメーザーライフルをぶっ放してきた海賊達

こちらも障害物の影に隠れながら応戦する

メーザーライフルは貫通しない。

振動により生物にしかダメージは与えないのだ。

しかも出力を抑えたパラライズモードにすれば相手を気絶させるだけも可能だ。

「ぐっ！」

「きゃっ！」

…ま、数から見てこちらの勝ちは間違いないか。
海賊数人と保安局員いっぱいだからなぁ

「さて…バゥズ級発見っと、設計図落ちてないかな」

「無いだろ。常識的に考えて」
そんな漫才を繰り返していた。

そしてそして

五時間ほど探索してるとサウザーン級の中に奴を見つけた。
「ふぉぁあ！そ、そら停戦としようじゃないか！わしはこれから辺境の惑星で余生を過ごすからの、な？な？」
サウザーン級の艦橋に居座っていたアルゴンである。
…つかこいつ…逃げようとしていたらしい。

そして保安局員と俺とトーロは
なにいってんのこいつ…
という目でみていたのだった。
「じゃその代わりにファズマティくださいな！」
「な、なんと！？」
「辺境いくのなら人工惑星いらないでしょ？俺がもらってやるからさ。その代わり見逃してやんよ。」
「おぉ。ありがたい！ではこのデータが…」
チップを取り出すアルゴン
「…ちなみに騙す気ならここの保安局員にフルボッコです」
冷や汗かいてチップを懐に戻すアルゴンさん
…やっぱりなにか仕掛ける気だったか
「す、すまん…こっちが本物だ…」
そういってチップを取り出し、受け取り端末に入れる
どうやらスカーバレルの全データが入っているらしく、端末で全て見ることは叶わないようだ。

「じゃこのサウザーンに隠れているといいよ。全員撤収！」

「お、おう…」

「本当にありがたい！」

歓喜するアルゴンを背に立ち去る俺たち。

…さて

「…クォーツ、エルメッツァ軍人に俺たちのいるエリア教えてやって、そこにアルゴンいるってね」

『はーい』

端末からクォーツに連絡する

「…お前ひどいな」

「たまたまエルメッツァの人が見つけたってことで、元々アルゴンを逃す気はないんだよ」

格納庫から出る時にエルメッツァ軍人の人すれ違った。

そしたらそしたら

そして翌日、科学班にチップのデータを任せて俺は艦橋に来た。

「ういっす、おはよー」

「あ、艦長。おはようございます。」

「はやいねぇ」

艦橋にいくとシアンさんとトスカさんがいた。

「んでどうなった？」

「はい。ファズマティのアルゴンを討ったことで海賊は一気に投降しました。主だった連中はエルメッツァ軍人の方々に捕まり、今朝、ファズマティから立ちました。」

「あと整備班連中がファズマティにあったバゥズ級一隻分解しちまったよ。いいのかい？」

「構わないっす。科学班と整備班は今回頑張ってくれたからね」

マジでシステム強奪して的確に海賊見つけてくれたからなぁ。

まぁ半分は海賊の技術奪取が目的らしいが…

『その整備班から報告です。バゥズ級から解析して得た装甲データで新たな無人艦載機の一番機が完成したとミユさんからたったいま連絡ありました。』

…ん？

「いやミユさん科学班でしょ。何故整備班と一緒に…」

「あー、そのことだけどね。カルバライヤで使われているディゴマ装甲を解析するチャンスだって整備班と共にいったんだよ」

…まじっすか…『それで艦長に見せるのでグロスター改に来てほしい。と』

「ういっす、じゃいってくるからね」

「『「いってらー」』」

そんなこんなでグロスター改に来たわけですが…

「…まじっすか。」

「ま、トーラスは機動性重視だったからな。先の戦いみたいに定位置攻撃するなら防御面が不安残るし、今回は迎撃重視にしてみた」

格納庫にあったそれは重厚とも言えるディゴマ装甲…さらにシールドモジュールを改修して作ったプラネイトディフェンダーを背中に１０機

ディゴマ装甲と合わせて高い防御力を発揮する。

そして右肩にジェネレーターを内蔵、そこからケーブルを用いる手持ちのビームキャノンを持つ

しかもこのビームキャノン、トーラスカノンを越える威力だという…

全長１６，３ｍ…

とどのつまり、ビルゴである

…マジですげぇよ。うちの整備班…

「で、どうよ？艦長…完全無人機予定なんだが」

「いやぁ…採用だな。確かに定位置迎撃はやるからな。攻撃のトーラス、迎撃のビルゴって感じで生産して」

「んでそのことなんだがな…生産しても置くとこないんだよ。新しく空母か航宙艦が欲しいとこでな。」

「…っていってもうちにある艦載能力のある設計図はソロモンだけだしな…バゥズ級は整備班が分解したし、サウザーン級は軍人達にやっちまったからなぁ…」

まぁ一隻あればなんとか…

「あぁ…全部分解しちまったからな」

…なんですと？

「…一隻じゃなく？」

「あぁ…全部だが？」

…まぁ海賊のだし、いいけど

「あ、艦長とペド、ちょうど良かったである」

「ペドいうなし」

最近軽く流すようになったなぁ

「ペドはどうでもいいである。艦長。スカーバレルのチップのデータから設計図を抽出したである。バゥズ級、ガラーナ級、ゼラーナ級、サウザーン級、オルドーネ級、ゲルドーネ級である。」

チップを差し出すホロムさん

「「！？」」

まさにちょうどいい感じにきたね

「ナイスタイミングだ！最高だホロム！」
「うひゃあ！」
…ホロムさんを抱きしめるタカギさん。
チップを落として赤面するホロムさん

「はいはい、ごちそうさま」
チップを拾い上げ、俺は立ち去った。
あいつら結婚したらいいんじゃね？

んで空間通商管理局の造船所に向かう途中、バジルさんとルンさんに出会った。
はて。助けたメディックの方々はエルメッツァ軍人と共に出て行ったと思ったが…
「やぁ。ゼロ君。」
「バジルさん。てっきりもう行ってしまったと思ったんですが」
「ゼロ君の保安局の人達治療してたら置いていかれたの」

さすがにうちの連中も無傷って訳じゃなかったしな。
けど置いていかないだろ…

「それでね。私達を君の艦で雇ってもらえないかなって」

「ルン…」

「あら。いいじゃない。お父さんだって困っていたし、辺境にばっかりいってメディックに睨まれてたじゃない。メディックは変わってしまったっていつも愚痴いってたじゃない」

「むむ…」

「それに医者がいないゼロ君の船なら絶対雇ってくれるわよ！」

「これは痛いとこをつくね。」

苦笑する俺とバジルさん

「という訳でどう！？」

「そうだね。是非お願いできないかな」

ふむふむ。バジルさんは医者としての腕は欲しいところだしな。

「こちらこそお願いします。」

にこやかにそう言う俺

こうして医者ゲット！

そしてバゥズ級を２隻作成、今回は防御に特化させるべくデフレクターとシールドモジュールを搭載。対空、対艦迎撃管制室も搭載した。

格納庫もあるので計３２機のビルゴを搭載予定だ。

こんなに早くバゥズ級が出来るとは思わなんだよ。

１２章　エルメッツァ編４（後書き）

今回はビルゴが出ました。
次回はなにを出そうかなぁ

13章　エルメッツァ終幕編（前書き）

エルメッツァ最後のお話しです～

13章　エルメッツァ終幕編

ファズマティに駐屯してから一週間。

まさかあっちからやってくるとは思わなんだ

『艦長。エルメッツァ中央政府軍の艦隊が接近中です。』

「にゃ？」

艦長室で書類仕事してたら艦隊接近の知らせがきた。

『どうします？』

「どう…ってなにもせず放置だな。入港するだろうから出迎えてくる」

とりあえず艦長室から出てく

そしてそして

「やぁゼロ君、本当にやったな！」

「ういっすオムス中佐」

艦隊を率いてきたのはオムス中佐さんだった

「君のおかげで中央の平和は保たれた。改めて礼を言う。ありがとう」

「いえ。俺たちはやりたいことをやっただけですよ。それより何故ここに？」

「うむ。売買の約束があったからな。ファズマティから脱出した部下から陥落の知らせがあったからな。購入に来させてもらった。とはいえ相場が分からぬだろうから４０００００Ｇほど用意した。」

「十分です！」

これで当面は安泰だな。

「それと…極秘の話をしにきた。君はエピタフを…どうしたね？」

きっと表情が変わったのだろう。オムス中佐が心配してきた。

「実は…」

俺はヴァランタインと交戦し、その果てにエピタフが失われたことを伝えた。

「…君は本当に凄いな。ヴァランタインに遭遇して生きているとは」

「たまたまですよ。それよりお話の続きを」

オムス中佐は頷くと続けた。

「小マゼラン銀河系外に旅立った政府の探査船が消息を絶っているのだ。エピタフ探査を名目にボラーレ宙域を超えた辺りから足取りがつかめない。こちらとしても捜索をおこなってはいるのだが…まぁその程度の情報ではある」

…確かヤッハバッハの情報が得られるイベントがあったな。

「ちといってみますわ。」

「む？そうか？」

そして俺は次の目的地をボラーレとした。

その趣旨を伝えるとすぐさま出港した。
みんな普通の惑星が恋しいってさ。
ボラーレは辺境だし、自然を満喫するにはちょうどいいだろう。

スカーバレルも壊滅したので海賊に合わずにいけた。

…そしてボラーレを前についた。
…あれ？地方軍と小競り合いあると思ったけどない？

入港してシフトごとで休暇を出した。

そして俺はトスカさんに誘われ酒場へと向かった
すると酒場に謎のおっちゃんがいた。

「…もしやあんたシュベインかい？」
知り合いに似ていたのだろう。
トスカさんが話しかけるとおっちゃんはすぐに返事した。

「…トスカ様！お久しぶりでございます！」
「知り合いですが？」

「まあね」
頷くトスカさん

「シュベイン・アルセゲイナいわゆる何でも屋でございます」

礼儀正しく一礼したシュベインさん

「ところであんたなんでいるんだい？」

「実はアルゼナイア宙域につながるボイドゲートの復活を確認しまして、トスカ様にご報告に…」

「なんだって！？あれはデッドゲートだったろ！」

「何故か復活しており、連中も…」

なにやら混み合った話のようだから離れるか

「なにかつもる話もあるでしょうから俺は他いきますよ」

「あ、あぁ…すまないね」

そして俺はトスカさん達と別れた。

その後、森や草原をいったり来たりしてると…

「…なにしてるんすか」

科学班と整備班が双眼鏡片手に森にいた。

「あ、艦長…ホロムさんが珍しく私服に白衣で出掛けましたので…」

っと科学班女性

「こっちは班長が珍しく綺麗な格好でよ。艦から降りていってさ」

っと整備班男性

「二人して待ち合わせしていたらしく、先ほど森の中に入っていきまして、それで我々も合流しました。」

と科学班男性

「…別にあの二人が出かけても不思議はなくないか？」

「「いえ、ただ単にタカギ班長がふられるのみたいだけで」」

…うわぁ。マジもんの野次馬だ…

…あ

「ならよぉ。もう少しわからないようにしたらどうだ？」

「「「！」」」

俺が科学班と整備班を問いただしていたらタカギさん達がやってきた。

「全員…スパナの刑だ！」

スパナを取り出したタカギさんが科学班と整備班を追いかける中、俺はホロムさんに近づいた

「…んでなにしにきたの？」

「んむ。実は森の中に情報屋があって、ネージリンスの艦載機技術を得てきたのである。さすがに大金になるのでタカギと割り勘でな」

「…それだけ？」

「他に何があるというのであるか？」

ホロムさんはともかくタカギさんへタレだな。いや、デートに誘ったからやったと思うべきか

あれ？たしかいつもタカギさんの事、ペト呼ばわりしてたはず…

「…そういえばペトって呼ばなくなったね？」

「…もう彼はペドとは呼べぬである」

顔を赤らめて腰をくねらせるホロムさん…

…なにがあったぁぁぁ！二人の間になにがあったぁぁぁ！？

閑話休題

「…という訳で無人機から離れようと思ってな。そのためにはカルバライヤとエルメッツァの技術だけじゃ満足いくもんはつくれねぇ」

「だからスカーバレル基地からハッキングしたのであるが、情報屋について記載があったのでな、ちょうどこの惑星らしいので来てみたのだ。」

「ふむふむ、戦力向上は願ってもない」

しかし機動力重視と対空能力重視以外じゃ何になるんだろうか？

火力重視？

「一応、ヘッドパーツのデザインはできているのである」

そう言われ差し出された画像には、ツインカメラ、ブイアンテアがあった。

「もう驚かねえ…」

それはいわゆるガンダムヘッドだ。

ウィングか？エピオンか？

どっちでも驚かないぜ

そしてそして

軌道エレベーターに乗ろうとしたらトスカさんに遭遇。

シュベインさんがエピタフ探査船らしきものからサルページしたものを受け取ったそうな、

それをオムス中佐に渡すため、ファズマティを目指して出港。

そしたらなんと惑星ネロ付近で…

「レーダーに感アリッス。サウザーン級2、アリアストア級4、テフィアン級4、オルドーネ級2、ガラーナ級5ッス」

「なんだい？その編成は？」

種類豊かな…残党と地方軍が戦闘中か？

「んー、おかしいッス。識別はサウザーン級一隻とアリアストア級は中央政府軍、もう一隻とテフィアン級は地方軍なんス。スカーバレル艦はみた通りッスけど、地方軍とスカーバレル艦が協力して中央政府軍を放置してるんスよ」

…あ～、なるほど、思い出した。

「ラッツィオ軍基地の司令かもしれん。ほら、スカーバレルと一緒にこっちに逃げたらしいし」

「「あ〜」」

みんな、記憶に微妙に残ってたらしく、言われてみれば、的な感じに思い出したようだ。

「あれ？でも名前なんだっけ？」

首を捻るトスカさん

「どうでもいいよ、これからダークマターにするし、ビルゴのテストにはいいだろ？」

『そう言われると思ってもう準備してあります！』

「…ようやく戦闘と思ったのに」

流石クォーツ…そして微妙にストレス貯めてたジランさん。

しかし、その時だった

グワァァァァン！

と爆音が轟いた。

「なんスか！？うわ！」
「今度はなんだい！」
驚くマドさん
「所属不明艦接近！異常なスピードッス！」
「損害軽微、被弾箇所の装甲が一部溶け出した程度みたいです」
『映像出します。』
中央画面に画像が現れる。
その艦は黒く、一見してテフィアン級に似ているが甲板部分に大型砲がついていたりと強化されているようだ
…なんだか見覚えあるな
そしてその艦の影からさらに同型艦が現れた
「え！？嘘！増えたッス」
「…まるで幻影だねぇ…ファントムとでも呼称するかい？」
「…ファントム…だと…？」
カルディアノンとかグリゴリとか…でるっていうのか？
はぁ。またバグ…いやあいつらの存在自体がバグか？
「見つけたぞ…世界の歪みを！」

「なにいってんだい？」

「いや言わなきゃいけない気がした。若干後悔しとる」

電波キター！ってか？

他の連中も気づいたのか。ファントム艦に攻撃を始めた。しかし、有り得ないくらいバレルロールを繰り返し、どんどん回避していく。

「所属不明艦３隻、スカーバレル及び中央政府軍、地方軍に攻撃開始。…一回の射撃でスカーバレル艦全滅ッス」

「なんとぉぉぉ！」

また電波キター

周りの視線冷たいよ～

「…こほん。ビルゴ及びトーラス発進。ビルゴは中央政府軍の護衛につかせろ。トーラスは所属不明艦に牽制攻撃。他の艦は後方に下がらせ、ソロモン級はこの場から所属不明艦…以降ファントム艦と呼称する。これに対して砲撃開始。中央政府軍を助けろ！」

「「了解！」」
「しゃああ！仕事だ仕事！」
ジランさんの興奮最高峰か？

ソロモンが前に出ながらトーラスを、バゥズ二隻が下がりながらビルゴを発進させる。
トーラスはファントム艦二隻についていきながらトーラスカノンを放つ。しかし、決定打にはいたらないようだ。
だがまるで艦載機のようにトーラス同様の動きを見せるファントム艦。対空放火こそないもののトランプ隊以外の無人機を甲板に接触させて撃破していく。
ちなみにトランプ隊は接触寸前にＭＳに変形、甲板に着地して至近距離射撃を浴びせていた。
そしてもう一隻は中央政府軍に向かっていたが…
中央政府軍の護衛にビルゴたちに集中豪雨のごとくビームを受け足止めを受けていた。
「砲雷班いまだ！主砲発射」
「おうよ！」
ソロモンから主砲三発が撃たれ、ファントム艦を貫いた…と思ったら耐えやがった。

とはいえダメージはデカいらしく、攻撃を止め、離れていった。

「艦長、トランプ隊から通信です。」

『艦長、こちらププロネンです。現在敵艦が撤退の素振りを見せています。追撃も可能ですが、いかがしますか？』

「深追いはしなくていいよ。」

『了解、帰還します。』

「どうやら、あっちも蹴りがついたみたいだねぇ」

画像をみれば中央政府軍が地方軍にとりついていた。

そっちはそっちで任せるとして…

「サウザーン級より入電、本艦隊はネロに入港するとのことです。」

「ならうちらもネロにいこうか。オムス中佐に例のブツ渡してもらおう」

そしてそして

惑星ネロ宇宙港

「毎回助けてもらって悪いな。ゼロ君」

「ういっす」

オムス中佐が乗っていたようです。

「毎度毎度すまないな。正直危なかった上に新手まできてしまっていたからな。」

むしろ新手のファントム艦に助けられた面もあるけど

「おそらくスカーバレル以外の海賊だろう。あまり気にする事はあるまい。」

ま、ファントム艦っていってもこちらさんにわからないだろうしな。

「ま、それはそれとして…エピタフ探査船の残骸引き取ってもらえませんか？」

「それは…つまり探査船は沈没したのか」

「そのようです。詳しくはわかりませんがある人が回収すると」
「では受け取ろう。解析すれば状況もわかるだろう」
「では受け取り作業といきましょう。ちょうど卸すところなので」
「うむ。では部下を呼んでおこう。」
端末を使って通信するオムス中佐。
しばらく待つのよ～
「さて…ゼロ君、エピタフ関連の情報だがエピタフについて研究しているジェロウ・ガン教授にあってみるといい。私から連絡しておこう。カルバライヤ星団のガゼオンにいるからね。」
「ういっす。じゃ補給が済んだらカルバライヤに行ってみます。」
「うむ。君には本当に世話になったよ」

そして俺はオムス中佐と別れた。
次はいよいよカルバライヤだ！

１３章　エルメッツァ終幕編（後書き）

次回はいよいよカルバライヤ。

今回出てきたファントム艦…わかるひといるだろうか…

１４章　カルバライヤ編１（前書き）

いよいよやってきました。カルバライヤ編！

１４章　カルバライヤ編１

さてさてドゥンガのさきにあるボイドゲートを通過した。

「やってまいりましたカルバライヤ！」

「「わあああ！」」

ロウズ組の歓声が凄い件…

「とりあえず当面平気とはいえ、稼ぎ相手の情報得ないと…」

確かここにも海賊いるはずだが…バグってる可能性もあるからな。

微妙に当てにならない原作知識…

「それでしたら一番近い惑星はシドウになりますね。」

「おし…まずはシドウいこう。そのあとは各惑星を巡りながらガゼオンだ」

エピタフはなくても困らないが、超重要アイテムだからな。一つはキープしときたい。

そしたらそしたら

「ゼロくーん」

「にゃにゃ？ルンどうしたの？」

何故か艦橋にルンがやってきた。

「あのね？お父さんが薬品類の整理が終わったから補給リストみて欲しいって」

そういってルンは俺に書類を手渡した。

「バジルさんの事は信用できるから直接補給班に渡してもいいのに…」

「でも補給班いないじゃない？」

「…そうだった。」

補給はドロイド任せだったからなぁ…

ちゃんと人間雇いたい…

書類仕事してくれたら負担減るし…

「とりあえずシドウにいくからそのときに補給するって伝えて」

「りょーかい！」

敬礼するナース服な彼女あぁ…なんかいいわぁ。

「…艦長×ルンかぁ。ルンが攻めなら面白いのに」

…どっかに腐女子いる気がする

さてさて

惑星シドウ

の

酒場

「カルバライヤ突入記念！大宴会ぃ！」

「「「うおおぉ！」」」

今回俺は主催でっす！

それぞれ陣営に別れて飲み始めている。

の…だが…

「…何故君らはここに？」

何人か俺の周りにいるんだが

「…女装はもうやだ」

と、航海長副官イネス

「だってお父さんまで飲み始めて、つまんないんだもん」

看護士ルン

「ほっとくとのまされちゃうから」

「…すまねぇ」

給仕ティータと保安局長トーロ

「…正直前回酷い目にあったス」

レーダー管制長マドさん

「…まぁまたカオスだしね」

どうなってるかというと…

「あはは！そりゃ大変だったねぇ」

「私はいってやったんです。こんな会社やめてやるって！」

「そしてゼロ艦長に雇われたんだよねー」

艦橋女性組

「おや？なかなかやるじゃないか」
「お前にゃ負けないよ」
飲み比べ始めた操舵班長アールドさんと砲雷班長ジランさん

「ふふふ…たーかぎ！」

「…俺、設計の続きしたかったんだが…」
酔ってタカギさんに甘えるホロムさん
「ほらほら、もう一杯」
「いやぁすみません」

父親同士で新興を深めている料理長ワンさんと医療班長バジルさん
特筆すべきはこの辺であとはあっちこっちで飲みまくってる。
あの中で素面なのはタカギさんくらいだな。

「…ちと外いこうか」

「うん」

「「は～い」」

「「うっす」」

そして俺らは外に出た。そしたら…

「あれ？あの服…」
「スカーバレルの連中が着てるやつッスね」
「…僕、あの人知ってる気がする」
というかあれは…

「よ、探しにきてそうそう会えるたぁ、驚きだ」
「ディゴさん！？なんで！？」

「軍人のあんたがなんでここにいるッスか？」
「そうだな、ゼロのクルーにしてもらおうとお前さんらを探しにきたんだよ、ちなみに軍は止めてきた」
「止めたってそんな簡単に…」
若干呆れ顔のイネス
「というかそう簡単に入れると思うのか？」
若干睨みつけるトーロ
「…ふむ。いっすよ」

「「「艦長！？」」」

「例え中央政府から派遣されたスパイとしても、余りある技術を持っているし、なにより彼の諜報能力は今後使えるだろう。…それにうちは万年人数不足だしな」

「じゃ、ついてきちまった部下も一緒にいいか？」

「構わないよ」

「艦長…？」

あまりの速決に疑惑顔のみんな、

ま、確かに早すぎかもな

「じゃ決まりって事でいいな？よろしく頼むぜみんな」

「「う…う？」」

「そら。いくよ。」

俺が先導しディゴが仲間に加わったことにまだ納得の行かない表情で歩き出す皆

距離を開けて歩いているとディゴが囁いてきた

「悪いな艦長…」

「構わないっていった…大方ザッカスの代わりにきたんでしょ？」

「はは…お見通しか。」

小さく笑うディゴ
ま、実際はザッカスさんは生きてるわけだが、いつ目覚めるかわからないしな
「あいつはダチでな。あんなことになっちまって…目が覚めるまでティータを守ってやらねぇと顔もあわせられねぇからな」

「律儀だねぇ。しかし嫌いじゃない」
ニヤリと笑うとディゴも笑い返した。
それはともかくとしてディゴの配置も考えないとな。
…部下もいるらしいから巡洋艦一隻任せてみるか？

そしてそして

艦に戻ると新たな問題が発生していた。

要は人事問題である。
今回新たに雇ったカルバライヤのクルーとディゴの部下は合わせると巡洋艦二隻は運用可能…しかも役職も被りまくりなのである。

まぁ、この問題はトーロとディゴの二人をバゥズ級の艦長に任命、そこに人事を配置することで事なきを得た。
とはいえほとんど無人仕様のため医務室と食堂が無いので急ぎ、惑星ブロッサムにて再度改修したのだ。
…まぁそのためスラスター制御室はずしたのだが…

そして現在はガゼオン目指し航行中だ
尚ディゴから聞いた話によるとここらで活動する海賊はグアッシュ海賊団と無慈悲な女王と呼ばれるサマラという事らしい
途中で赤いカルバライヤ艦隊を見つけたが、そいつがそうらしい。
…輸送艦あったから儲けものだったなぁ畜生…

そんなこんなしてたら

惑星ガゼオン
の地上

軌道エレベーターを降りてすぐ、看板を見つけた。
…というかジェロウガン研究所を見つけた。

「…近っ」
軌道エレベーターの脇にあるし…
研究所結構小さいし

中に入ってオムス中佐の名前を出したらすぐに一室に案内された
部屋には老人がいた

「よくきてくれた。ジェロウ・ガンだ。話はきいちょるヨ。エピタフを探しているのだネ。それでエピタフの調査をしたいと」

「なので教授に色々協力してもらいたくて…」

そういうと唸りながら頷いた
「ふぅむ…エピタフは検体の入手ができないため難しくてネ…そもそもエピタフの組成において…」

かなり長いので割愛！

「というわけだネ」
「「…」」
一緒にきたイネス、トーロが呆然としてる
「つまりデッドゲート付近の惑星ムーレアにエピタフ関連の遺跡があって調査したいと。そのため我が艦隊に同行したいと」
「うむ。そうゆう事だネ」

「な。なるほど」
「…よくわかったねゼロ」

「…わかる部分だけ聞いてたからな」
まぁぶっちゃけ原作知識だけど、本当にわかんなかったしな
「ただ、グアッシュ海賊団が暗躍していてネ、カルバライヤ宙域保安局によって封鎖されとるんだ」
「…じゃあ海賊退治しないとか」

「「いつもの事だ」ね」
ま、確かにネ

「あてもないならドゥボルクにいってみたらどうかネ？カルバライヤにはエルメッツァにはない鉱石あるからネ」

うちのマッド…特にミユさんが喜びそうだな、

「うし、じゃドゥボルクにいこうかネ」

「口調うつったぞ」

きにすんなし

その後、俺はモジュール設計社で買い物してから宇宙港に戻った。

そしたら…

ヘルプGの部屋から煙出てた。

「…こげくさいな」

「…それに煙くないか？」

「いやこれ明らかになにかあったろう」

煙のでる部屋にいくとその部屋にはバチバチショートしたヘルプGが横たわっていた。

「おいじっちゃん！」

「「じっちゃん！？」」

悪いか？

「うぅ…じゅみょうが…きたようじゃ…」

いやそれをいうなら耐久年数か？

と想いつつも言うのはやめた

「なにいってんだじっちゃん！まだいきれるよ！」

「いや機械だろ」

トーロの突っ込みは気にしない

「再生不能再生不能…すみやかに代理を…はけ…よう…せ」

そのまま動かなくなったヘルプG

「じっちゃーーーん！」

「…さて、艦に戻ろうか」

「「なにがしたいんだ！あんたは！」」

二人に叩かれた

「いたいー」

「…」

涙目で立ち去る中、ジェロウ・ガン教授はヘルプGの亡骸（？）をみていた。

そして艦に戻り艦橋でヒメさんやイネスとガゼオンからドゥボルクまでいくルートを算出していると…

「あぁ…艦長ちといいかネ？」
ジェロウが艦橋にやってきた。

「どうしました教授？」
「うん。この艦の科学班と整備班はすごいネ」

…またなにかしたんか？あいつら…

「…」

ニヤニヤしてるホロムさんとタカギさんと共に見知らぬ女性がいた。

「…子供作るには気が早いと思いますぜ？」

「違うである。ヘルプガールである。」

「ナノポリノの表皮を被せた。骨格はヘルプＧからだから余り変更点もないぜ」

ちょいまち。ヘルプＧっていったか？

「…まさかあの壊れたじっちゃんを…」

「その通りだネ。どのみち廃材になるから回収したのだヨ」

…いいのかこれ

けどもっと機械的な見た目のはず。このヘルプガールは完全な女だ

「彼ら二人の技術の賜物だネ。まさか皮膚のような装甲を研究していたとはね。」

それがナノポリノというやつか。

「手から７０００度のヒートカッターがでるんじゃよーと。完全なるコンバットロイドになったんじゃよーと」

「…メンタリティはヘルプＧのままなんだ…」

「うむ。爺な語尾のアンドロイドも萌えるである」

萌えって…アンタね…

『いいなぁ…』

…クォーツも肉体が欲しいのか。

それはおいといて

あとでスペックをみたが、外付けで高機動型砲撃仕様と重装砲撃型になるらしい。

…見た目が擬人化ウィングガンダムとフルアーマーガンダムなんだが…

閑話休題

そしてドゥボルクに向かうため出航。

途中でグアッシュ海賊団をおいしく頂きながら航行していく。

今まで無人艦だったせいか、新たな戦法が使えディゴとトーロが指揮するバウズ級による別方向からの攻撃でボコボコにできた。

そしてドゥボルクで休息を取り…ちと酒場で騒動を起こしながらも次の鉱山のあるザザンに向かうことになった。

１４章　カルバライヤ編１（後書き）

いずれチート対チートをやろうとおもいまふ

15章　カルバライヤ編2（前書き）

戦争編を書きたくて書きたくて仕方ないです。

まぁ当分先ですがね…

15章　カルバライヤ編2

「…前方に戦闘反応アリッス」「こんなところで？」

「大方、採掘資源の輸送艦を襲ってるんじゃないのかい？」

「いや、カルバライヤの宙域保安局の艦ッスね。民間客船にバクゥ級が隣接してるッス」

客船襲ってるのかよ。海賊だな。

…いや海賊か

「海賊の数は？」

「宙域保安局と敵対してるのはバクゥ級3、タタワ級4、客船襲っているのはバクゥ級1、タタワ級2ッス」

ふむ…。

「これより客船及び宙域保安局の救援を行う。僚艦艦長を呼び出せ。」

「了解。」

『ゼロか？』

『どうするんだ？』

画面にディゴとトーロが現れる

「二人で客船についてるグアッシュ海賊団を攻撃して欲しい。」

『了解だ。』

『おっし。やるか』

通信は切れ、バゥズ級二隻は先行していく。

トーロ艦はバクゥ級に向かっていき、ディゴ艦はトーロ艦の前方に出て、タタワ級二隻を相手していた。

これは白兵挑んでいる海賊艦を倒すために編み出した戦術だ。

実はトーロ艦は保安局員出の連中が多くおり、白兵に長けている。

それをディゴ艦が護衛しつつ、護衛艦を薙払う戦法だ。

さらにビルゴを出し、防御及び火力増強もしている。

「…さてアーメスタ艦隊と共にこちらも砲撃開始。トランプ隊とトーラスも発進！」

「「了解！」」

ソロモン艦隊からレーザーが放たれ、艦載機が発進する。

…何故か黒い機体は出ず、白い翼を持った機体が出撃した

「…はれ？トーラスでないっス」
「…また整備班の新作かねぇ」
…今回まだ発表うけてないぞ？
「…整備班長呼び出せ」
「は…はいぃ！」
「うわ…艦長怒ってる」
『なんだ艦長…ひぃっ！？』
「なに脅えてるのかな？ココロアタリアルノカナ？」

『あ、あれだろ？トランプ隊専用機体、ムラサメ！最大加速ではトーラスに劣るが、対空迎撃能力は高い！』
…まさかのガンダムじゃないガンダムでした。
『リーダーのププロネン用にレーダードームつけた偵察型と主翼をレールガンと標準用センサーをつけたオオツキガタ、３つほどバリエーションがある』
「…まぁいいか…次からはできたら報告しろよ？」
『アイアイサー！』
ビシッと敬礼をするのを見たら通信を切る
「…でも新型すごいッス。特にオオツキガタ。装甲の弱い部分に的

確に撃つから対艦性能が高いッスよ。」

「…仕事ねぇ」

「…ムラサメのほうも対空性能高そうだねぇ。」

「仕事減る…」

感想漏らす面々…だがジランさんだけ愚痴ってる。

「とはいえ、艦載機だけじゃ落とすのに時間かかるだろ。砲雷班は攻撃を継続！」

「しゃあああ！」

「「さっきからうるさい」っス！」

開戦から１０分ほどで戦闘は終了した。
バクゥ級を逃してしまったが致し方あるまい。

「艦長。保安局から通信です。」

「あ、ちょいまち」

「？」

通信を繋ぐのを待たせてから俺はメガネ（もちろん伊達）を取り出し装備する。

なんか微妙にキャラがわかんないからな。

既に遅いかもしれんが…

「いいですよ。つないでください。」

「は、はい」

以下ひそひそ

「艦長って目悪いんだっけ？」

「というかいきなり敬語…なんかこわいッス」

「メガネかけた艦長…イネス君みたいで萌え」

「ってヒメさん僕にそんな事を思ってたんですか？」

「…全員聞こえてますよ」

「！！！」

さて、とりあえずおいといて通信だな

『こちらカルバライヤ宙域保安局、ウィンネル・デア・デイン三等宙尉だ。貴艦の協力に感謝する。』

「おや、その声は」

ふむ。最近の記憶にあるな

そうこうしてると映像が繋がった

『君は確かドゥボルクで…』

『おっ、酒場で暴れてた少年じゃないか』

そう、ドゥボルクであった騒動は実は乱闘なのだ。

ネージリンス人がボコられてるのを見たら身体が動いてたね。うん。

その時やってきた保安局員がこの二人。ウィンネルさんとバリオさんだ。

『まさかそのデカい艦の艦長か？』

「そうです。」

『…船団登録はしてないようだが、あまり動き回ると警戒されるぞ？下手すれば軍に討たれる』

「…マジですか…？」

…確かにここまで艦隊多いのはヤバいか。

『今回の礼として船団登録をしておこう。』

『それ元々保安局の仕事つかサービスじゃねぇか。』

…バリオさんの一言で空気が固まった。

要は対した礼は彼は思いつかなかったらしい。

『…と、とにかく我々はこれから客船の被害を確認するが君たちに改めて礼をしたい。良かったら共にブロッサムの宙域保安局にきてくれないか？』

「了解です。」

そして切れる通信

「保安局艦、客船と共に移動開始ッス。」

「では我が艦隊も追従してください。」

「「「その前にメガネ止めてください」ス」」

…そんなに嫌か？

そしてさすがにソロモン艦隊に手を出す気はないのかブロッサムに何事もなくついた。

そして宙域保安局

「海賊退治はお前たちの領分だろう！」

「いいじゃねぇか！戦力貸してくれたって減るもんじゃねぇし！」

どうやらバリオさんともう一人が口喧嘩してるらしい。

ちなみに今回保安局行きは艦長ズと副長のトスカさんだ。

「減るだろうが！確実に！もうお前とは話してられん！」

怒って立ち去るもう一人の軍人

「ちっ！勝手にしやがれ！」

キレながら建物に入るバリオさん

「…なんだいまの」

「さてね。色々あるんだよ。色々」

「色々ね…」

トスカさんの言葉に呆れながら治安局に入った。

するとすぐ一室に案内された。

「先ほどは助かった。」

とウィンネルさん

「まだちゃんと自己紹介してなかったな。バリオ・ジル・バリオ。ヨロシク」

とバリオさん

「そして我々の直属の上司」

「シーバット・イグ・ノーズ二等宙佐だ。部下への協力に感謝する。」

「俺はゼロです。よろしくお願いします。」

保安局に入る前にメガネかけた俺はメガネモードで話しかける

「シーバット宙佐、お願いがあります。ムーレアへの航行を許可していただけませんか？」

「…ふむ。しかしムーレア周辺には蜘蛛の巣と呼ばれる小惑星帯があり、そこはグアッシュ海賊団の拠点なのだ。駐留艦隊もかなりの数だ。」

「いいじゃないですか。彼は恐らく噂の海賊殺しの『黒い死神』ですよ。協力を頼みましょう」

…黒から黒い死神に進化してる…だと…。

俺をみたものは皆死ぬぜぇ？ってか！？

「彼らが…？」

「漆黒の巨大艦を旗艦とした艦隊…彼ら以外にいないでしょう。ザクロウの連中にも面は割れてませんしね。」

「バリオ！民間人を巻き込む気か？」

「仕方ないだろ。バハロスの連中は当てにできねぇ。時間もない。」

「うぐっ…」

「むむ…」

黙るウィンネルさんとシーバット宙佐

しかし話が見えないぜ。

「一つ聞きたい。グアッシュ海賊団はバカにならない勢力になっている。通行を許可して、君たちはムーレアにいけるかね？」

ふむ。保安局がいうんだ。少なくともスカーバレルよりデカいのかもな

「ま。まずは当たってみないとわかりません。偵察はしようと思います。」

「…わかった。許可しよう。」

「宙佐！？」

驚き宙佐を見るバリオさん。

シーバット宙佐はため息をつきながら答えた。

「私とて民間人を巻き込むのは好かんよ。ゼロ君、気をつけていってきたまえ。無茶はしないでくれよ…」

「はい。宙佐ありがとうございます。ではもう一件もお願いします。」

「もう一件？」

首を傾げたシーバット宙佐

そこにバリオさんが話に加わってきた。

「あぁ。船団登録なら名前さえ決めてもらえばこっちで処理しとく。やっぱ『黒』か『黒い死神』か？」

その通り名はなんかやだな。…ふむ。ならば…

「…黒き翼、『黒翼』で」

「わかった。道中気をつけてな。」

そして俺たちは退室した。そして一通りの補給をした後、俺たちはムーレアに向かって発進した。

「前方にカルバライヤ宙域保安局艦の封鎖を確認。あ、開けてくれたッス」

宙域保安局艦隊は封鎖を解き、ソロモン艦隊…またの名を黒翼艦隊を通すべく、進路上から離れた

「話はついてるようだね。」

「うん。微速前進」

「アイアイサー！」

そしてそして

蜘蛛の巣を遠目に確認できるところまで来ると、残骸を見つけた。

「微弱な信号を探知…民間船の残骸みたいね。その信号が救難信号なんだけど…」

「ふむ…トーロ艦を向かわせて確認させて、それ以外は現地点で待機。偵察にププロネンさんを向かわせて」

ソロモンから偵察型ムラサメが一機発進。

それとバウズ級が残骸へと近づいていった。

「レーダー管制は警戒を厳に、見つかってもおかしくないからね」

「…でもおかしいッス。何の音沙汰もないッスよ」

確かに…もう見つかってもいい頃合いでもある

「ま、今回は偵察が主体なんだ。むしろ好都合だろうさ」

トスカさんのいうこともっともである。

「…トーロ艦から入電生存者を発見したとのことです。」

「生き残りがいたのか。運がいいなそいつ。」

「…しっかし客船にしろこの船にしろ。カルバライヤの民間船は変なところにいるな」

「「違いない。」」

客船はまだ定期船とかで理由もわかるが、この船はおかしいだろ。

原作でも思ったがなんで封鎖されたほうにいるんだ？

そしてそして

四時間後、ププロネンさんが戻ってきた。

彼には休息を取ってもらい、タカギさん。ホロムさんを艦橋に呼び出して解析を始めた。

「…見える艦だけでもかなりの数ッスね。艦隊をそのまま拠点に放っておくのも気になるんスが…」

「…それは恐らく、拠点の施設が生産工場になっているからであるな。これを見たらわかるが、小惑星にビヤット級が数隻隣接しているである。恐らくあれが生活拠点なのであるな。」

ホロムさん曰わく大型輸送艦を基地代わりにするのは海賊がよく使う手らしい。

むしろスカーバレルみたいに人工惑星持っているほうが有り得ないんだそうな。

「…輸送するのはボイエン級か。…ん？」

タカギさんがなにか見つけたようだ。
それにトスカさんが突っ込む

「なんだい？いいなよ。」

「…いやこのシルエットな？宙域保安局にあったグアッシュ海賊の艦船リストにないんだよ？」

…ちょいまち。そんなリスト知らんぞ？

「…ちといま確認する…あぁ。照合できた。カルバライヤ軍の戦艦、ドーゴ級だな。」

…いまなにと照合した？

「ちょっとまつッス。グアッシュ海賊団の照合リストは空間通商管理局からダウンロードしたッスが、カルバライヤ軍艦のはまだッスよ？」

「ん？宙域保安局にハッキングしたんだよ。構わないだろ？」

「…いやダメだろ」

というかなにしてるんですか。アンタは…

「…しかしドーゴ級か…」

原作じゃ確か良くて重巡洋艦のバウズ級が幹部クラスのものだった

はずだ。

画面のドーゴ級はグアッシュ海賊団の色に変更されているし、連中のだろうけど…

やはり原作通りにはならないか。

「…数も数だし、戦艦いるんじゃ無理はできないな。」

「…しかし突っ込めばかろうじて勝てるである」

「それは駄目だ。シーバット宙佐に話そう。彼らの計画を当てにするしかあるまい…」

「「了解ッス」」

黒翼艦隊は反転しブロッサムに向けて進路を取った。

１５章　カルバライヤ編２（後書き）

今回からあとがきにたまにオリジナル要素の情報を載せます。

第一弾は我らが旗艦。
ソロモン級双胴空母！

全長２３６０ｍ全高６４０ｍとエルメラーダより若干大きく、全幅は翼がないため少ない。
兵装種類は対艦レーザーＬとＭ３門ずつ。対艦補正がかなり高いためチート空母である。

しかも双胴のため原作の倍…最大１２０機搭載可能な上拡張性も高くなってるのでシャンクヤード並みにモジュールが入ったりしている。

しかも生産以外行えるため、ある意味旗艦にして小さな街並みの施設がある。
実際にはかかれてないが有人艦になったバゥズ級やファクトリーシップのグロスター／ｆｓやアルク／ｆｓで働く人は航行中の休暇はソロモンで遊ぶ人が多い。

その辺はいつか書きたい。うん。

１６章　カルバライヤ編３（前書き）

最近オリジナル要素が強い気がします

16章　カルバライヤ編3

ブロッサムに向かう航路の途中…

ソロモン整備室

別名科学班と整備班の巣

タカギさんに呼ばれてきたら、ジェロウ教授を含めたマッド四天王がいた。

「…タカギさん。ついに人形に手を出すなんて…」

「いや違うぞ！？」

いやでもね。入った途端女性体の人形あるし…一体は俺デザインのクォーツっぽいし、もう一体は栗色の髪の少女だ。

「ヘルガの妹である。一体は姉というべきかもしれん」

ホロムさんがそういうが、意味わからんし。

「…ちゃんと説明するとだ。彼女達は私たちが作ったコンバットロイド。外装や武装は外付けだが」

そして機動スイッチ…開けちゃいやーん。と書かれたスイッチを押した。

…突っ込まないぞ？

「はーい！皆のアイドルクーちゃんです！こんにちはマスター！」

「…お初にお目にかかります。私はシュテルです。」

…一人、某マテリアルな気がする。というかクォーツ？

「…クォーツってあれか？この艦そのものの…」

「うむ。体が欲しがっていたのでな。一つ渡した。もちろん戦闘できるである。」

「コンバット、ホーメーション！」

「…着装」

クォーツは元気よく、シュテルは冷淡に叫ぶと、いそいそと装甲を付け始めた。

…いや地味だな、オイ！

数分立てば、大半が白く一部が青く、七本の剣を持ったクォーツと、白い装甲に胴体が青いシュテルがいた。

…すっげー見覚えあるんだが

「ヘルガの増加装甲をシュテルに流用したんだヨ。クォーツのは新造だがネ」

…確かヘルガの追加装備がウイングで…
クォーツは明らかにエクシア、シュテルはデュエル…

擬人化娘シリーズか？これ…

「こいつを量産「開発中止」なんだと！？」
確かに使えるが、量産するほど資産は渡せない。
「ここまで精巧だとコスト高いだろ？」
「一体でジュノーかアルク一隻買えるであるな」
マジか！？高！
「追加装備を入れればもう一隻買えるヨ」
うわ！高すぎ！
船一隻てどんだけだよ！
「…開発中止。したらワカルヨネ！」
「…あ、あぁ」
まぁ支給した研究資金使い果たしたらしいから当分何もできないだろうが…

ま、作ったのは仕方ないのでシュテルとクォーツと共に艦内巡りをすることに、

確か行ってない場所もあったしな。

自然ドームとかショップとか

「…艦長。グロスターがソロモンの正面に回り込んでいくようですが…」

「ん？」

窓があり外が見えるエリアについたらしく、シュテルは外を見てソロモンを追い抜かしつつ、相対速度を合わせて正面同士で接舷しようとしてるのが見える。

まぁ要は現在位置は艦橋下だからなのだが

「トーラスの追加が終わったみたいだな。うちの艦載機はああやって補給してるんだよ。」

ここからでは見えないが、グロスター改のカタパルトからソロモンのカタパルトを通じて無人トーラスが輸送されているだろう。これだとトーラスの推進力を使わずに短時間で補給を終える。

ただ見た目が鳥の餌付けっぽいんだよな。

「…なるほど」

それと、どうやらシュテルの頭脳は生まれたてのＣＵのようだそうな。

クォーツ同様すぐに自己を確率できたが、シュテルの場合、知識好奇心が強いらしい。

「マスター、マスター。えへへ…」

そして嬉しそうに俺の手を引くクォーツ。

それをみたシュテルがそっと俺の手を握った。

…娘っぽいかと思ったが妹が近いかな。

妹かぁ…チェルシーどうなったかな？

さてさてとりあえず自然ドームにやってきましたが…

「「「うわぁ…」」」

そこには村があった。っていうか牧場？

パンモロはいるし、池はあるし、果樹園あるし…

あ、魚が跳ねた。魚いるんだ…

もはや自然ドームよりビオトープじゃないか？

そしていたるところにお弁当食べてる女性クルーや木登りしてる男性クルー。釣りしてるやつもいれば、木の下で本読んでるやつもいる。

…そこにアールドが、釣りしてるのを見つけた。

「…いつの間にこうなった。」

「わー！」

「…わー…」

離れて駆け出したクォーツとシュテル。

シュテルが若干棒読みだな。さてさて

「アールドさん、釣れるんで？」

「あ？艦長か…それがさっぱりでな」

アールドさんに話しかけた。

「しっかしいつの間にかこんな設備に…」

「科学班の連中の仕業だぜ？」

…またか。

「俺は休みにはよくくるんだけどよ。木の苗植えたり、池作ったりし始めたやつがいてな。そこに科学班印の育毛剤を木の苗にぶっかけた馬鹿がいて…」

…馬鹿つーか。

育毛剤かけるのは…

確かに自然ドームはご自由にご利用ください。にしてあったがご自由過ぎだろ！？

「んで果樹は急成長、魚は誰かが放流したのが増えたみたいだな。」

「…そして皆の憩いの場に…か」

結果的に良い場所になったからいいとするか。

「マスター！」

「主ぃ～…」

駆け寄ってきたクォーツとシュテル。なにかと思ったら

「あきた！」

「あきた…」

…早すぎと思う。

そしてアールドさんと別れてやってきたのは艦橋である。

皆にいったら驚かれ、科学班と整備班の名前出したら納得された。
「ちょうど良かった。そろそろブロッサムに着くところだよ。」
「ようやくか…」
ため息つきながら艦長席に座る。
「それとトーロ艦から通信があります。リアさんが目覚めたので、報告と艦隊で働きたいそうです。」
「リアさん？」
はて。誰だ？
「ほら。残骸にいたやつだよ。」
首を傾げていたらトスカさんが教えてくれた。
「あ～！あの人！」
「どうやら音信不通の男を探していたらしいです。」
「確かトーロ艦のオペレーターが不足してたね、雇用してやって」
「了解」
さてさて、どうするか…
宙域保安局次第だな…

ブロッサム

宙域保安局

再びシーバット宙佐達のいる部屋にきた
今回は解説にホロムさんも追加だ

「…それでどうだったかね？」

「…強行すればなんとか。まぁするきはないですよ。ホロムさん」

「うむ。まずはここをみてほしい。」

ホログラムモデルを使った説明をしていった

「…ドーゴ級か。我々のデータにもないな」

「それと規模も増えつつあります。手を討つなら早くをお勧めします。」

唸るシーバット宙佐。

それを後押しするようにバリオさんが続けた。

「んで、俺たちの計画に荷担してもらえるのか？」
「構いません。奴らを倒さなきゃムーレアまで行けませんからね。」
「そうか、助かる。では打ち合わせ場所は…」
シーバット宙佐が話し始めると、バリオさんが口をはさんだ
「一杯引っ掛けながらの方がいいでしょう。ここで話せるものでもありませんし。あそこなら人が絶えることもないですから」
「む、それもそうか」
どうやら迂闊に聴かれたら困る話らしい。
「じゃ俺らはいってきます。ウィンネル」
「あぁ。」
「では宙佐。また」
「うむ」
俺たちはバリオさんとウィンネルさんと一緒に退室した
酒場に来るとウィンネルと俺以外は酒頼んだ。
ウィンネルさんは仕事中だかららしい。

…え、バリオさんは飲んじゃうの？

「とりあえずとっとと話してくんねぇかな？」

酒のみながら言う話じゃないです、ディゴさん。

「先にグアッシュ海賊についてはどこまで知ってるか聞きたい」

「莫大な勢力を誇り、サマラという海賊と敵対している。そしてザクロウとなんらかの関係を持ってる…ですか？」

「…ザクロウの事まで知ってるのか」

驚くバリオさん

ザクロウに関しては宙域保安局での会話で名前が出たから推測だけど、

「バリオさんは宙域保安局でザクロウの連中に面が割れてないといいましたので推測です」

「…バリオ」

「すまねぇ。しかし細かいとこに気づいたな。ま、それだけ知ってれば十分だ」

軽く謝るバリオさん。

「それに不思議な事に宙域保安局と主だった戦闘は避けられてて。

軍が動く理由もないから宙域保安局でなんとかするしかない事も知っててくれ。」

そうか。だから放置するしかないのか…

「そんなため、俺たちは誠に遺憾ながら、毒を以て毒を制すことにしたんだ。そこに薬がやってきたという訳さ。」

「「？」」

俺らが首を傾げる中ディゴさんはにやけた。

「なるほど、サマラか。さしずめ薬は黒翼だろう？」

「あぁ。その通り」

「しかし保安局が海賊とつるむのかよ？」

トーロの指摘ももっともだ。しかし事態はそれ以上に急を要するのだろう。

「あぁ。ヤバい。ヤバすぎだ。だがそうせざるを得ないほどグアッシュ海賊団の勢いは増しているんだ。このままだとカルバライヤの要、このジャンクションの海運が壊滅しちまう。」

「…」

バリオさんの瞳には揺るがない決意のようなものが見えた。この男、一見軽いが実はかなり熱い男らしい。

「わかりました。で、サマラとどうしたらいいので？」

「サマラと交渉し、協力を要請してほしい。保安局の人間からじゃ話聞かないだろ？」

「まぁ本来は敵対する間柄だもんなぁ」

「そうゆうことだ。条件はカルバライヤ全宙域における指名手配の停止、過去の罪状二万件の消去だ。さすがに保安局が報酬出すわけにもいかない。」

「確かに…それよりサマラに会うにはどうしろと？」

「彼女は資源惑星ザザンの周辺に出るらしい。あの辺りは採掘船や輸送艦を狙ったグアッシュの幹部クラスもいるからな、そいつをサマラはさらに狙う訳だ。」

まるで食物連鎖だな…

「…とりあえずなんとかしてみましょう。」

「助かる。これは先に礼になるがバハロスの艦船設計社の案内状だ。必要があれば訪ねるといい。」

確かに艦隊の増強もすべきだな…

だが案はない！

俺たちは酒場を後にした、

んで兎にも角にも補給を済ませてブロッサムを出港した。

さっそくザザン周辺宙域

「…前方に交戦反応あるッスね。」「いましたか？」

「どうでもいいけどずっとメガネかけてる気かい？」

当分つけます。

「今モニターに出します！」

そこには赤い艦と赤黒い艦が打ち合っていた。

赤黒いほうが劣勢のようだ。

「間違いないね。サマラ・ク・スィーのエリエロンドだ。相手は…

大マゼラン製のようだがいつまでもつか…」

そんな中、画面のエリエロンドがいつつの小型ユニットを射出、そこにレーザーを撃ち、収束、赤黒いのに放てば一撃で赤黒いのはよろけた

「リフレクションショット…」

「おや。よく知ってるねぇ。あれなら大抵の艦はひとたまりもないねぇ」

「よし。とにかく間に「入る艦確認ッス！」は？」

画面を見れば5隻のガラーナ級が突っ込んでいた。ただしそれはこれまた赤黒い。

「情報解析確認…ファントム艦ッス！こんな時に…」

…ここで歪みが発生するか。この世界よ…

「どうするゼロ？エリエロンドは大丈夫だろうが、もう一隻はどうだか…」

ファントム艦は破壊しかしない。あえていうならファージみたいなもんだ。野放しにする必要もないだろう。

「仕方ない。目標ファントム艦。攻撃開始する！」

１６章　カルバライヤ編３（後書き）

今回はパロディのネタから一つ

ファントム艦
出典　スターオーシャン４

破壊のみを考える謎の艦
オーバーロード以外の強制介入により発生したバグである。
全てケイ素で形成されていて接触物を攻撃特化させて増える。

宇宙に取っては癌みたいなもの

１７章　カルバライヤ編４（前書き）

注意！この章ではグロい表現があります！

17章　カルバライヤ編４

しかしファントム艦…奴はなんなんだろうか。

原作でもだが、強化された状態で増えやがる。

この世界だと駆逐艦に対艦レーザーＬが増設された感じだ。あのガラーナ級はＬ、Ｍ、Ｍ、Ｓ、Ｓの火力みたいだし、砲だけで大マゼラン製戦艦並みになってる

小マゼラン製の艦船では同型艦の小隊でファントム艦一隻と渡り合えるかどうか…

ゲームと違い、機動性がそのまま攻撃に転化するこの世界では駆逐艦は本気で重要視される存在だ。

ゲームでは戦艦だけでいける。だが、この世界では戦艦の弱点は実は駆逐艦ともいえる。

機動性の低い戦艦は機動性の高い駆逐艦に三次元攻撃に晒されることになる。

まぁそういえばあの艦載機のチート並みの威力も頷ける…かもしれない。

「ち、早すぎて照準があわねぇ！」

「エリエロンドともう一隻、アンノウン艦がファントム艦に回頭…あ！」

画面の二隻がファントム艦隊に向こうとするが、それを終える前に二隻の間をファントム艦が通過した。

すれ違い様にレーザーを何度もぶち込まれ、赤黒い艦のダメージは増えたようだ。

「…無駄な心配かもしれないがエリエロンドを落とされたら大変だ。トランプ隊を発進させろ。トーラスはファントム相手じゃ被害が増えるだけだ」

「了解です。」

ｓｉｄｅｏｕｔ

第三者ｓｉｄｅ

五隻のファントムガラーナ艦が縦横無尽にエリエロンドとアンノウン艦の周りを駆け巡りながら砲火を浴びせる

そこに向かっていく３０機あまりのムラサメ…トランプ隊だ。

最初は１０人ほどだったが補給された人員から有志を募っていった

結果、だんだん増えていた

「…これはスカーバレルのガラーナ級とは比べものにならない性能ですね。」

レーダードームを背負った偵察型ムラサメを操るププロネンが小さく呟いた。

『どうするんだい？下手に撃てばファントム以外に当たっちまう』

青いオオツキガタに乗るガザンがププロネンに指示を仰ぐ。トーラスから乗り換えてからムラサメ隊のリーダーはププロネン、オオツキガタ隊のリーダーはガザンといった風に別れていた。

「そうですね。じっくりどこまで攻撃を受けるか攻めたいところですが、いまは時間がありません。機関部を狙い、奴らのスピードを奪いましょう。」

『あいよ。艦砲があたるようにするんだな』

「えぇ。前回はたまたまというべきでしょうからね」

ムラサメ隊とオオツキガタ隊は別れてファントムガラーナ艦を追いかけ始めた。赤黒いそれはたびたび軌道を修正しながら止まる事なく目標を攻撃していた。

エリエロンドは回頭を止め、じっと耐えていた。

そして正面にファントムガラーナ艦が一隻通った瞬間、その砲火を全て同時に発射！

その砲火を以てして一隻落とし爆散させた。
しかしもう一隻はたびたび回頭を試み、四方八方に砲撃、自らのダメージを増やしていた。

「…流石は歴戦の海賊…ですか」
エリエロンドの対応に感心しつつも追いかけながらビームライフルを放つ。
何度も何度も…何機ものムラサメと共に
しまいには機関部を破損させ、相手の機動性を奪うことに成功した。
方向転換しようと減速したファントムガラーナ艦はさらなる加速を得られず、遠方からソロモン艦隊からの砲撃を受けて爆散した。
ガザン率いるオオツキガタも、追いかけながらレールキャノンを撃ち、ファントムガラーナ艦のありとあらゆるスラスターを潰していった。
方向転換も減速もできなくなったそれは近くの小惑星に正面から突っ込み、潰れた。
これで3隻。
二隻のファントムガラーナ艦は逃亡を試みようと反転。

しかしその一隻にトランプ隊が殺到した。

艦橋部分にレールキャノンをぶち込み、甲板に対して平行に飛行しつつビーム砲を撃ち、砲門を貫き、三機ほどＭＳに変形して一斉にビームライフルを放ち、横っ腹を貫く

艦載機に襲われた一隻に対して最後の一隻は既に戦域から離れ始めていた。

しかしその後ろから収束されたレーザーが機関部からその船体を貫いた。

今までの報復とばかりにエリエロンドから放たれたリフレクションショットである。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ゼロｓｉｄｅｉｎ

「…なんとかなったな。エリエロンドに通信要請」

ぶっちゃけどうなるかと…

ププロネンさん達がいなければこっちも危なかった。

「あ。謎の船、ザザンに向けて撤退していくッス。」
「まぁどんなバカでもあの後で戦闘継続はしないだろう」
…トスカさんの言うとおり。ま、それはさておき
「要請無視されました。」
「はぁ…再度エリエロンドに入電、通信要請と…」
「ぬるいよ、強制通信でマイク渡しな」
「あ」
だからって艦長のを奪わなくても…
「おらぁ！聞こえてるんだろ！サマラ！返事しなぁ！」
キーーーン！
という音とともに通信が入った。
…音は絶対トスカさんだ。
「その下品な声…トスカか」
「ちと良い話があるんだ。聞くだけ聞かないか？」
少し迷ったのだろうか。サマラさんは時間を開けてから返事した。
「いいだろう。そっちのデカいのに向かう」

「あいよ。」

そういうと通信は切れた。

「…トスカさん」

「ま、詳しい事は聞かないでおくれよ。さ、あんたは出向かいにいかないとだよ」

トスカさんに言われて俺は艦橋から出た。

しばらくするとエアロックにエリエロンドが接舷、大男とサマラさんがやってきた。

「…こいつが今のトスカの趣味か？」

「な「…いいえ。それよりそちらの男性がアナタの趣味なので？」…」

トスカさんがなにか言う前に遮る。

「いうではないか…」

「そちらこそ」

「「ふふふ」」

…なんか波長合った気がする。

そして宙域治安局の話をするとサマラさんは予想通りという感じに頷いた。

「やはり連中に手を焼いたか。」

「ですので、サマラさんにご助力賜りたいのです。」

「…考えてやってもいい」

「お嬢！？」

サマラさんの言葉に副官らしき大男が驚いた。

「考えてみろ。ザクロウに入るチャンスだろ？」

「あ、な～る…」

またここでもザクロウの名が…

「…やはりザクロウですか。」

「「やはり？」」

トスカさんとサマラさんが同時に声を上げた。

「…そもそもグアッシュが捕まっているのに増長する事がおかしいのです。そこから考えるべきは二つ。グアッシュがザクロウから何らかの方法で指示しているか、もしくはザクロウがグアッシュの手に落ちているか…」

「…あんた、そこまでわかってたのかい。」

「単なる推測です」

まぁ原作知識だけど

「…この男は何者だ？」

睨まれても感じないんだぜ！

「…それよりザクロウに入らずとも、情報を得ることは可能です。アナタが今まで拿捕したグアッシュの幹部に聞けばいい…どうしました？」

睨みが増しましたぜ？

「…確かに。なぜそこに気付かなかったのか…だが我々は捕虜なぞ取らん」

皆殺しなんですね？わかります

「…ならばこれから捕まえましょう」
「そしてどうする？」
「その幹部に聞き、保安局に引き渡します。まずは幹部の拿捕を」
「…わかった。ならば我々も同行しよう」

こうしてサマラさんが一時的に仲間になった
重力アンカーで艦隊を小惑星帯に隠し、グアッシュ海賊団を待つことに
交流もあるが海賊というわけで若干うちのメンバーは怖がっとるみたい。
だけどディゴとその部下はすごい馬が合うようだ。
副官の大男…ガディさん、ディゴさん、トスカさんの三人が酒盛り始めたり…

閑話休題

「…きたッス。バゥズ級1、バクゥ級4、それと民間輸送船が一隻

ッス」

「…全て巡洋艦ですか…」

『あの編成ならば幹部はおそらくバゥズ級だろう。どうする気だ？』

「お任せください。トランプ隊、トーラス、ビルゴ出撃。トランプ隊はバゥズ級の動きを止め、トーラスとビルゴはそれ以外を撃沈させろ。そしてトーロ艦でいつものように。トーロ頼みます」

『おうよ。けどディゴはどうするんだ？』

「…というかトスカさんもいませんよ艦長」

『「あいつらはほっとけ」』

サマラさんと台詞がかぶった

まだ酒飲んでるんだよ…あの三人

まぁうちのチート艦載機には連中も手も足も出ず…

『…あっけないな』

ムラサメとオオツキガタに包囲され、バゥズ級が二隻並んでいた。

「しかし同型艦のはずなのにうちの艦のほうが性能いい気がするのは…」

「気のせいじゃないぜ！」

「ないのである」

「ないんだぜ！」

「ないのです…」

「ないのじゃよー」

タカギさんとホロムさん、そして擬人化娘三人衆がやってきた。

「…なにしにきたんですか？」

「まぁみてほしいである。どう思う？」

「…すごく…おおきいです」

なんか寸劇始めたクォーツとホロムさん

「…えっと食べ「それいったら撃つである」…はい」

なんかメーザーライフルを向けられた

「…えっとおめでた？」
「そうである。」
「…まさか襲われた一発で出来たとはな」
…で、なぜ艦橋に？
「艦長に報告にじゃよ～」
「僕らは付き添い！」
「なのです…」
…よし。それはおいといて
「…おめでとうございます。それでタカギさん。何故気のせいじゃないと？」
「それはな。スカーバレルで改造された設計図で、拡張性がエルメッツァ製艦並みになっているんだ。しかも性能を変えずにな」
そういえば記憶以上にモジュール入ると思ったら…そうゆう事だったのか。
『…で、どうする少年』
「一度トーロ艦に移り幹部を尋問します。報告は後ほど」
『わかった』

…さて、いきますか。

さてさて

トーロ艦

ププロネンさんに頼んでムラサメでトーロ艦に連れて行ってもらった

「…こっちだ」

何故か格納庫にある一室に案内された。

そこには椅子に縛り付けられたやつがいた。

「グアッシュ海賊団のダダラッチだそうだ。こいつ、グアッシュ海賊団の中でもそこそこの幹部らしいぜ」

「ふん…このような年端もいかぬ小僧にとらえられるとはやきが回ったものだ」

生意気そうに睨む
さてさて…

「トーロ、ププロネンさん、部屋からでてください。」

「おう…」
「わかりました。」

これでダダラッチと二人きりになった
「いっておくがワガハイはなにひとつしゃべらんぞ」

「…」

俺は壁に掛かっていたマシンガンタイプのメーザーライフルを持ち、
ダダラッチに向けた

「…む？なんだ？脅しのつもり…」

途中でダダラッチは黙った。

何故なら俺がメーザーライフルのパラライズモードの最低出力でダ
ダラッチに浴びせたから。

威力でいうなら静電気程度だが、それを連射で放った。
気絶も出来ず苦痛しかない。

「は、はひぃ！このて、…」

また途中で黙るダダラッチ

「堪忍ですよ？本当にしたいわけではないんです、話さないあなたが悪いんですから」

ニッコリ微笑みながらスークリフブレードをダダラッチの右目に当てた

「大丈夫。リラクゼーション治療ありますから」

「じょ…じょうだ…あああああ！ぎゃあああああ！」

ははは。大げさだなぁ

ちとずれて耳たぶ突き刺しただけじゃないか。

ゆっくりと抜けば、ダダラッチの息は上がっていた。

「あひっ…あひぃー！貴様、正気かぁッ？」

「えぇ。次は肩がいいですかね。それとも…ここがいいですか？使い道なさそうですしねぇ」

そういいながら股間に切っ先を向けたら…

「貴様ッ…イカレてる！イカレてるぅぅ！」

悪いが、俺はな

「自分、奴隷とかそうゆう人身売買嫌いなんですよ。」

ニッコリ最高の笑みを浮かべる

ゆっくり切っ先が近づくのをみて、ダダラッチは青ざめた

「ま、まてまてぇぇ！言う！何でも言うぅぅ！」

「最初からそうすればいいのに」

俺はスークリフブレードを納刀した。

そして尋問した結果

やはりザクロウから海賊団に指示があったようだ。

「グアッシュ様にかかればザクロウも安全な別荘というわけだ。おまけに攫った人間を渡せば資金もたんまり得られる。」

…やっぱり人身売買が収入源か。

エゴかもしれんが人身売買は大嫌いだ。

殺すのは躊躇はない。だが、嫌いなもんは嫌いなんだよ。

しかしこのおっさん、人身売買を話す時、若干嫌そうなとこをみると、グアッシュの独断ッてのが可能性高いか？

「…さて、ブロッサムにいきますか…」

こいつ引き渡せばさすがに動くだろ。

１７章　カルバライヤ編４（後書き）

初の拷問シーン…難しいですね…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2763z/

無限暴走航路

2012年1月14日16時49分発行